長崎県文化財調査報告書　第126集

伊木力遺跡 I

1996

長崎県教育委員会

発刊にあたって

今回調査をいたしました伊木力遺跡は，縄文時代早期から中世の遺跡として知られていました。特に，昭和60年の発掘調査では縄文時代の丸木舟が出土し，全国的にも注目をあびた遺跡です。

このたび，国道改良工事で工事に伴い，事業主体である長崎土木事務所より委託を受け，長崎県教育委員会が平成６年８月から12月までの間，発掘調査を実施しました。その結果，縄文時代の堅果類の貯蔵遺構をはじめ，弥生時代から中世までの土器や石器などの遺物が多数出土しました。このことは，長崎県内の埋蔵文化財の研究に新たな資料を付け加えるとともに，先史・有史の大村湾南岸地区の有様がより具体的に明らかになるという成果をもたらした重要な発見であったと思います。

本書では，弥生時代を中心とする遺物が出土した地区を報告し，縄文時代の遺物が多数出土した調査区の内容については，平成７年に調査したものと併せて次年度に報告いたします。

埋蔵文化財は，わたしたちの大切な財産であり，後世に伝えていくことが不可欠であります。本書が，埋蔵文化財を保護するための一助として活用されることを切望してやみません。

最後になりましたが，地元の方々の御理解と御協力に深く感謝申し上げますとともに，調査・整理作業に御助力頂いた関係機関・諸先生方に，厚く御礼申し上げます。

平成８年３月

長崎県教育委員会教育長

中　川　　忠

例　　言

1．本書は，平成６年８月22日から12月７日に長崎県西彼杵郡多良見町船津郷で実施した伊木力遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，一般国道207号特殊改良工事に伴う発掘調査である。

3．調査は，長崎県長崎土木事務所の依頼により，長崎県教育委員会文化課が平成５年度に行った試掘調査の結果実施し，主任文化財保護主事宮崎貴夫と文化財調査員高原愛が担当した。

4．調査は，水田部のＡ地区と，ミカン畑に利用されている低谷部のＢ地区に分割して実施したが，Ａ地区については平成８年度の調査報告と併せて報告する。

5．本書の執筆は，文化財保護主事福田一志，文化財調査員高原愛，渡邊康行，樋口公美子が担当した。

6．本書関係の資料は，現在長崎県教育委員会文化課立山分室に保管している。

7．なお，本遺跡の正式名称は船津遺跡であるが，多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編で使用している伊木力遺跡を用いる。

8．本書の編集は高原が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境

1．地　　形……1（福田）

2．歴史的環境……2（〃）

Ⅱ　調査の経緯

1．調査の経過……6（高原）

2．調査の方法……6（〃）

Ⅲ　層　　序

1．層序……6（高原）

2．遺物の出土状況……8（〃）

Ⅳ　遺　　物

1．土器……9

(1)　縄文土器……9（高原）

(2)　弥生土器……10（樋口）

2．石　　器……20

(1)　剥片石器……20（福田）

(2)　礫 石 器……25（渡邊）

3．中世の遺物……33

Ⅴ　ま　と　め

弥生土器・土師器……43（樋口）

石　　器……43（渡邊）

鉄　製　品……44（樋口）

中世陶磁器からみた伊木力氏……44（福田）

挿　図　目　次

図１　遺跡位置図……1
図２　多良見町内の遺跡……2
図３　化屋大島遺跡石棺実測図……3
図４　中通（舟津）城位置図……4
図５　周辺の地形と調査区配置図……7
図６　調査区と土層状況図……8
図７　縄文土器……9
図８　弥生土器・古式土師器……10
図９　〃　・　〃　……12
図10　〃　・　〃　……14
図11　弥生土器・古式土師器……15
図12　〃　・　〃　……16
図13　〃　・　〃　……17
図14　〃　・　〃　……18
図15　調査区・層位別土器点数……18
図16　剥片石器……22
図17　〃　……23
図18　〃　……24
図19　礫石器……26
図20　〃　……27
図21　礫石器……29
図22　鉄製品……30
図23　白磁碗……34
図24　白磁・青白磁……35
図25　青磁碗……36
図26　青磁碗・皿……37
図27　その他の舶載陶磁器……37
図28　国産・輸入陶器……39
図29　滑石製品……40
図30　〃　……41

表　目　次

表１　多良見町内遺跡地名表……5
表２　弥生土器・古式土師器，器種構成……19
表３　壺低部細分器形の比率……19
表４　石器一覧表・組成表……31
表５　伊木力遺跡Ｂ地点出土の土器・陶磁器の組成……42

図　版　目　次

図版１　調査区遠・近景……49
図版２　弥生土器・古式土師器……50
図版３　弥生土器……51
図版４　剥片石器……52
図版５　礫石器……53
図版６　白磁・青磁……54
図版７　国産・輸入陶器……55
図版８　滑石製品……56

Ⅰ．位置と環境

1　地　　形

長崎県の南部は，西彼杵半島，長崎半島，島原半島の三つの半島により構成され，中央部に西彼杵半島と，大村扇状地とに挟まれて大村湾が存在する。大村湾周辺は，西側が急峻な山々を頂き，険しい地形であるのに対し，東側は平野部が比較的発達しており，なだらかな地形である。遺跡も大規模なものは東側に多く，西側の遺跡は小規模になる傾向にある。伊木力地区は，この大村湾の南奥部に位置し，三方を西の琴尾岳（451m），東の普賢岳（322m），南の猪見岳（363.5m）の急峻な山に挟まれており，地形的には西彼杵半島と同じ地形上にある。地質的には矢上地溝帯と，長崎地溝帯とに挟まれ，遺跡周辺は安山岩質凝灰角礫岩で構成されている。この凝灰角礫岩の侵食により，海岸線は砂地を形成しており，遺跡周辺が舟津という地名であり，古くは良港であったこともうなずける。伊木力地区の中央には，猪見岳の裾の左右の支流を水源とした伊木力川が流れ，この堆積作用によって形成された沖積平野と豊富な水源によって，町内でも屈指の水田地帯となっている。現在の海岸線は，後世の埋め立てにより大村湾側に陸地化しているが，本来の海岸線は現在より奥まっていたことが知られる。遺跡周辺の地形は，伊木力川の影響が強く，遺跡の調査によっても伊木力川の旧河道が何回かにわたって変化したり，周辺の丘陵からの土砂の供給が盛んであったことが知られる。

この地は，日当たりのよい斜面と温暖な気候を利用して天正年間より，みかん栽培がおこなわれ，「伊木力みかん」として全国に出荷されているため，みかんの産地として全国的にも有名である。

図1　遺 跡 位 置 図

参考文献

1．多良見町教育委員会編　1995『多良見町郷土誌』
2．同志社大学考古学研究室編　1990『伊木力遺跡』

2　歴史的環境

大村湾を取り巻く周辺には，多くの遺跡が存在するが，とりわけ東側の平野部に遺跡が集中し，それとは対照的に西彼杵半島では遺跡数が少なく，小規模な遺跡が点在するにとどまる。これはひとえに，地形的な制約がその背景に存在することは，容易に察せられる。多良見町内における遺跡数は，現在知られているところで，24箇所あり，その多くは狭小な平野部に位置している。近年の開発によって調査後消滅した遺跡を含めても，数的には少ない方であろう。ただし，この中で調査をした遺跡が数カ所あるが，それぞれに独自の特徴をもっており，学術的にも貴重な資料を提供している。ここでは主に，調査がなされた遺跡を中心に説明を加えていくことにする。

「長崎県遺跡地図」によれば，町内の旧石器時代の遺跡としては，13箇所が知られている。ほとんどが複合遺跡として扱われ，剥片等が表採されているにすぎない。ただし，木床遺跡（消滅），伊木力遺跡では，ナイフ形石器が出土しており，確実な資料としては現在この2遺跡だけである。隣の長与町では，旧石器時代の遺跡として堂崎遺跡が知られ，調査によって細石核・ナイフ形石器・彫器等が多数出土しており，大規模な遺跡であることが知られている。

縄文時代の遺跡として登録されている遺跡は，15箇所である。調査された遺跡としては，木床遺跡（消滅），伊木力遺跡，伊木力川遺跡の3箇所がある。本報告の伊木力遺跡は，過去に2回の調査が

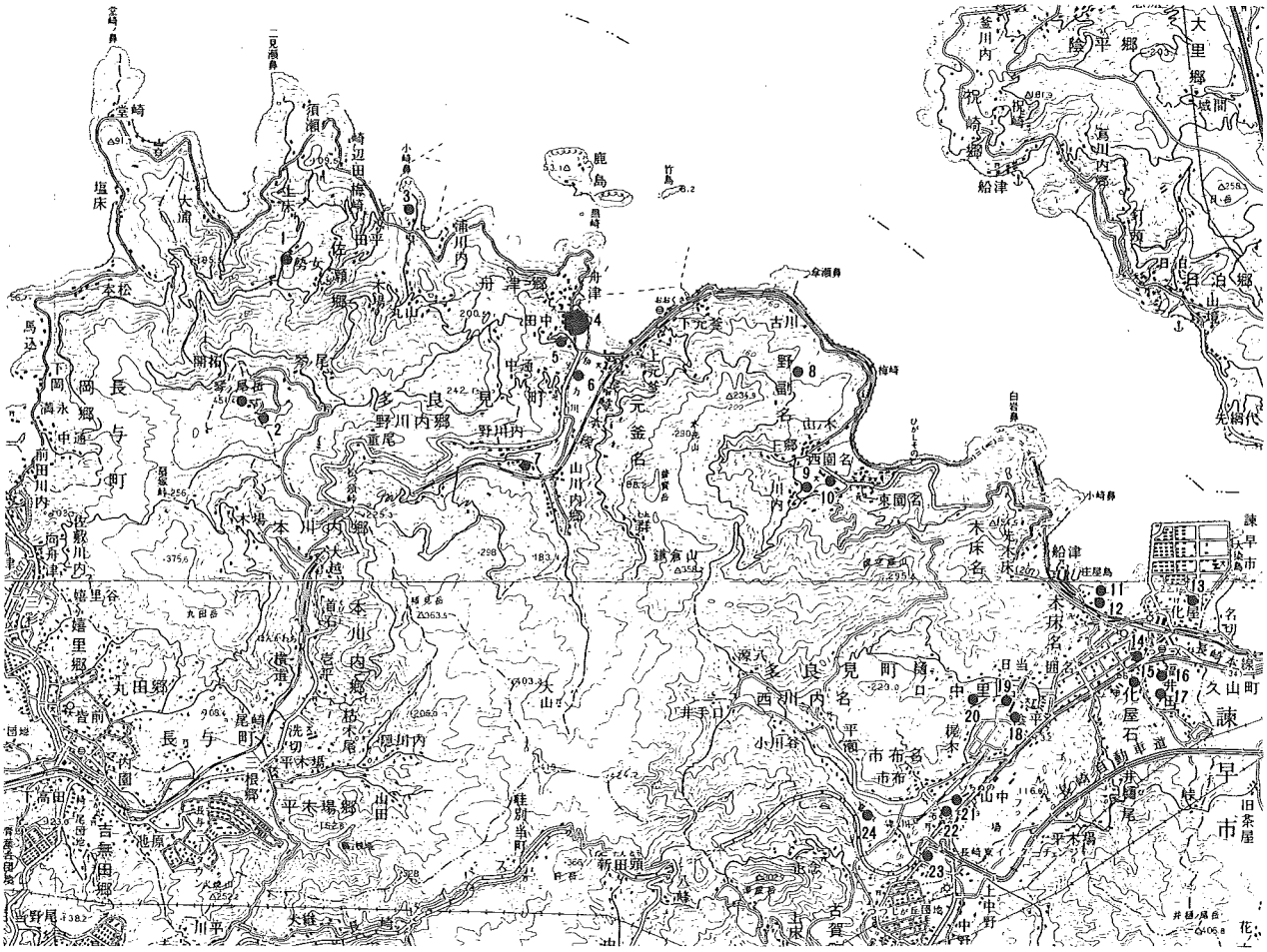


図2　多良見町内の遺跡

実施されている。2回の調査は，伊木力小学校の通学道路の建設予定地において，多良見町を事業主体として，同志社大学が調査を行ったものである。1984年8月に第1次調査が，翌年に第2次調査が行われ，それぞれに概報が出されるとともに，本報告を1990年に出版している。これによると，遺跡は縄文から近世にまで及び，遺物は2万点以上出土しているという。ただし，その内の9割が縄文時代の遺物で，その中でも前期と後期初頭の遺物が主体となっているようである。土器では轟式・曽畑式土器，坂の下式土器などに主体があり，石器は石錘・石斧の他，各種の剝片石器が出土している。動物遺体として，シカ・イノシシ，植物遺体の中では，前期に属するというモモの種子の出土や，丸木舟の出土は，考古学上の貴重な発見とされる。同志社大学の調査以後，1993年～1995年にかけて，一般国道建設のため，県文化課によって2回の本調査が行われた。1回目にA地点とB地点の調査がおこなわれたが，B地点の調査（今回報告分）では弥生・中世を主体とする遺物が出土し，縄文時代の遺物はほとんど出土していないことから，同志社大学調査の弥生・中世の出土遺物も，この地区からの搬入であった可能性を示唆できる。またA地点の調査では，同志社大学の調査地点とほぼ同じ内容を持つ遺物群が出土し，伊木力遺跡の縄文時代前期を中心とする遺跡の範囲が，広大なものであったことが立証された。また，この調査では，前期のドングリの貯蔵穴が16基確認され，さらに南側にのびることが考えられ，1995年に，2回目の調査が行われた（来年度報告分）。この調査により，あらたに6基の貯蔵穴が確認され，全体で22基の貯蔵穴が確認されたことになる。また後期初頭と思われる貯蔵穴も3基確認されている。この2回の調査により弥生後期，及び中世の主体部が確認されたこと，縄文時代の遺構が確認されたことなど，前回の調査を補完する資料が出土した。

弥生時代の遺跡として登録されている遺跡は，4箇所である。ただし，調査後に消滅した遺跡も数

表1　多良見町内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代・その他
1	琴尾山烽火台跡	佐瀬郷1880－17	烽火台跡	近世　県指定
2	琴ノ尾岳烽火台遺跡	本川内郷琴尾山	烽火台跡	〃
3	小崎鼻遺跡	佐瀬郷小崎鼻	遺物包含地	先・縄
4	伊木力遺跡	舟津郷	〃	先・縄・弥・中世
5	中通（舟津）城跡	〃　中通	城跡	中世
6	伊木力川遺跡	舟津郷及び岳漆郷	遺物包含地	弥生
7	山川内遺跡	山川内郷字山川	墳墓	中世
8	盗っ人岩陰遺跡	野幅郷	岩陰遺跡	
9	川内遺跡	西園名川内	遺物包含地	先・縄
10	釘原遺跡	〃　釘原	〃	〃
11	元釜A遺跡	木床名元釜	〃	〃
12	元釜B遺跡	〃　〃	〃	〃
13	化屋B遺跡	化屋名東大島	〃	〃
14	上阿蘇遺跡	〃　阿蘇神社内	墳墓	弥生
15	阿蘇前遺跡	〃　阿蘇前	遺物包含地	縄文
16	野副遺跡	〃　福井田字野副	〃	先・縄
17	合戦場遺跡	〃　〃	〃	〃
18	蔭平宝篋印塔群	中里名蔭平	石造物	中世
19	蔭平石棺	〃　〃	墳墓	弥・古
20	蔭平遺跡	〃　蔭山	墳墓	〃
21	尾ノ上遺跡	市布名尾ノ上	遺物包含地	先・縄
22	古鍛冶屋遺跡	〃　古鍛冶屋	〃	〃
23	中野遺跡	〃　中野	〃	〃
24	轟遺跡	〃　轟	〃	〃

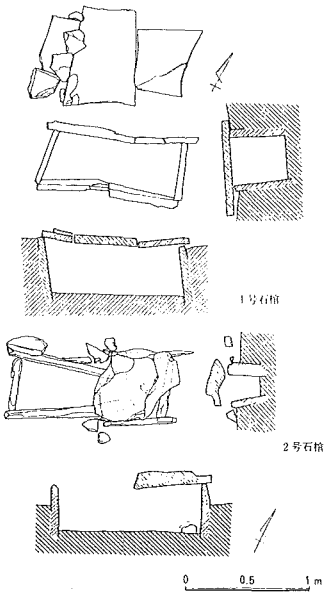


図3　化屋大島遺跡
石棺実測図

カ所存在する。その中でも，化屋大島遺跡は弥生の代表的な遺跡で，箱式石棺が数基発見され，７基が調査されている。その中で残りの良い第１号石棺と，第２号石棺は，平たい板状の安産岩を使用し側壁２枚，木口１枚で構成する長方形の石棺である。内部からそれぞれ前期末の鉢型土器・壺型土器が出土している。これらの石棺の様相は，時津町の前島遺跡の３～５石棺に様相が酷似しており，前期末から，中期前葉の石棺形態として捉えられよう。その他の弥生時代の遺跡して，伊木力遺跡・伊木力川遺跡がある。伊木力遺跡では，県の調査部分のＢ地点で後期の土器を主体としているが，同志社大学の調査地点では，中期初頭～終末までの土器が出土しており，石包丁も１点出土している。また，伊木力川遺跡では，遺物の量は少ないが，縄文晩期～弥生後期まで全時期にわたって出土している。これらの状況から，伊木力地区の弥生の生活拠点は，最初に伊木力川中流域にあったものが，下流域へ移動していったことも考えられよう。

古墳時代の遺跡は，２箇所が知られているが，高塚古墳などは存在していない。ただし，伊木力遺跡などにおいて，須恵器・土師器などが少数ではあるが出土していることから，付近に古墳時代の居住区があったことは推察できる。古代の遺跡としては登録はないが，伊木力遺跡では11世紀～12世紀にかけての白磁碗が出土していることから，平安時代の後葉にこの地の土豪が居住していたものと思われる。

中世については，『日本城郭体系』によれば，山城２と館跡１があるとされている。山城は，金谷城と中通城（長崎県遺跡地図によれば舟津城）で，金谷城については詳細なことは判明していないので省略する。『多良見町郷土誌』によれば，中通城については，大村藩の『郷村記』中に，古城之事として次のように記載されている。

一，古　　城

長崎往環道……の方にある處の高山也，地名を城の尾と伝，元禄舊記に頂上東西拾二間，南北拾四間，畝歩にして五畝拾八歩，西北の方に堀あり，横貳間，長サ三拾間程，高五拾六間程とあり，今は畠となりて形も不分明なり，城主築立の時代不知。

このことから，この城は元禄のころから知られていたことが判る。現在の城跡は，熊野神社の西南の標高20mを測る丘陵上に位置し，伊木力遺跡の西側にあたる丘陵は，東側に突出し，東側の斜面は急勾配であるため，谷あいに沿って登るしかない状況である。元禄期には，西北の方に堀ありとしているが，今は形も不分明なり……とあるように，現在ではその遺構などは

図４　中通（舟津）城位置図

畑地として埋められている可能性がある。丘陵の前面には標高10m程のテラスがあり，この地に館等を構えたものと思われるが，1993年の範囲確認調査では，この部分は削平されており，遺構などの確認はできなかった。この城の築城年代や城主については，『日本城郭体系』・『多良見町誌』において不明としながらも，南北朝のころに文献に登場する，伊木力氏の居城ではないかと推察している。伊木力氏が文献上に登場するのは，嘉暦四年（1329）「正慶乱離志裏文書」に伊木力三郎入道了覚の名が記載されたことを皮切りに，正平三年（1348）「深堀文書」の一色道猷書下に伊木力兵衛二郎が，同じく正平十八年（1363）「福田文書」の彼杵庄南方一揆連判状に伊木力六郎左衛門尉義通を筆頭に，＜同所＞藤原通勝・幸昌・通重・通久の名が見える。この藤原氏については，＜同所＞とあることから伊木力氏の一族として考えらえており，名前に，伊木力義通の通の字が多く使われていることなどもその確証となるものと思われる。この三つの文献から，14世紀の前葉～後葉にかけて，この地区に伊木力氏を名乗る者が存在したことは，疑いのないことである。この時期は，南北朝の争乱の時期であり，県下でも多くの山城が作られているため，この中通城（舟津城）についても，文献上に登場する伊木力氏との関連が，非常に強いと考えられる。中通城（舟津城）について，今後調査することにより明らかになるであろう。近世の遺跡では，県指定の琴ノ尾岳狼煙台を挙げることができる。この狼煙台は，長崎に異国船が来航したときに，長崎の狼火山番所から狼煙をあげ，大村領に属する琴ノ尾岳狼煙場と諫早領の多良岳狼煙場とに知らせることにより，長崎の警備体制を厳重にするという役割があった。旧石器時代から近世まで，多良見町の遺跡について説明を加えてきたが，今回報告する伊木力遺跡周辺は，多良見町を代表する遺跡が特に多い地域であることが理解されよう。これは他の地域からの直接的な流入を疎外する地理的条件（三方を深い山に囲まれている）を備えていたこと，逆に他の地域への流入をはかる，良港を備えていたこと……，などの要因がこの地域の断続的な歴史的を育ませものと思われる。

参考文献

1．長崎県文化財調査報告書第110集『長崎県遺跡地図』 ── 長崎市・諫早市・大村市・西彼杵郡・北高来郡地区 ── 1994
2．多良見町教育委員会同志社大学考古学研究室編『伊木力・熊野神社遺跡』発掘調査概報　1985
3．多良見町教育委員会同志社大学考古学研究室編『伊木力遺跡』第２次発掘調査概報　1986
4．多良見町教育委員会同志社大学考古学研究室編『伊木力遺跡』 1990
5．多良見町文化財調査報告書第６集『琴ノ岳公園造成に伴う琴ノ尾岳烽火台跡緊急整備発掘調査報告書』 1989
6．新人物往来社『日本城郭体系』17　長崎佐賀　1980
7．多良見町教育委員会『多良見町郷土誌』 1995
8．多良見町教育委員会『木床遺跡』 1987
9．時津町埋蔵文化財調査報告書第２集『前島古墳群Ⅱ』 1994

Ⅱ．調査の経緯

1．調査の経過

伊木力遺跡は，昭和59年と60年に伊木力小学校の通学路に伴う事業として，多良見町教育委員会主体により本格的な発掘が行われた。その際，縄文時代早期～晩期の遺物が多数出土し，また，丸木舟状の大形加工材を検出して注目を集めた。さらに，最古のモモの種も発見され，話題となった。平成５年には，一般国道207号線特殊改良工事に伴う範囲確認調査を行い，12か所の調査坑のうち，東端水田部と西端谷部の計３か所で縄文時代前期から中世にかけての遺物包含層を確認した。この試掘調査を受け，今回の調査を行った。

平成６年８月22日から12月７日に実施された本調査では，西側谷部の235をＢ地区，東端水田部の163をＡ地区と設定した。

Ｂ地区は標高８程の低い谷部に位置し，見晴らしがよく，良質のミカン畑として利用されている。Ａ地区は，標高２～３程の低い水田地に設定した。後者は，縄文時代前期以降の遺構・遺物が出土しているが，平成７年度にＡ地点のみ拡張して調査を実施するため，次年度に一括して報告する予定である。

今回の調査は，後に給水制限になるほど良好な天気が続き，暑さがかなり厳しい現場であった。また，Ｂ地区では大礫が多く調査は難航するかと思われたが，負傷者もなく，調査は予定より早く終了した。調査後，小学校が近く，道路に沿った場所であるため，安全を考慮して直ちに埋め戻しを行った。

2．調査の方法

Ｂ地区調査は８月22日から９月30日まで実施した。

Ｂ地区内部を５×５の11調査区に分割し，南北軸を南からＡ・Ｂ，東西軸を東から１～６と設定した。Ｂ地区自体が変形しているため，各調査区で面積が異なる。（第図）

表土はバックフォーで0.5程剝ぎ，0.5～1.5を人力で掘り下げた８遺物は，各調査区の各層位によりそれぞれ一括して取り上げた。出土した遺物数は膨大で，Ｂ地区だけでパンコンテナ57箱分検出できた。

Ⅲ．層　　序

1．層　　序

層位は，基本的に６層に分けられる。さらに，３層と６層を除く層については，土色・土質によって各々ａ・ｂに細分した（第　図）。

１ａ層と２ａ層上部については人工的堆積層であるため，バックフォーで一括して剝いだ。３層は

図５　周辺の地形と調査区配置図

黒褐色を呈し，中世磁器等の破片が多く出土した。4層は礫が多く，特に西側の谷部方面には径50程の大礫が検出され，また，4層出土の土器群に至ってはかなり摩耗している。そのため，4層は土石流的な2次堆積によるものと考えられる。

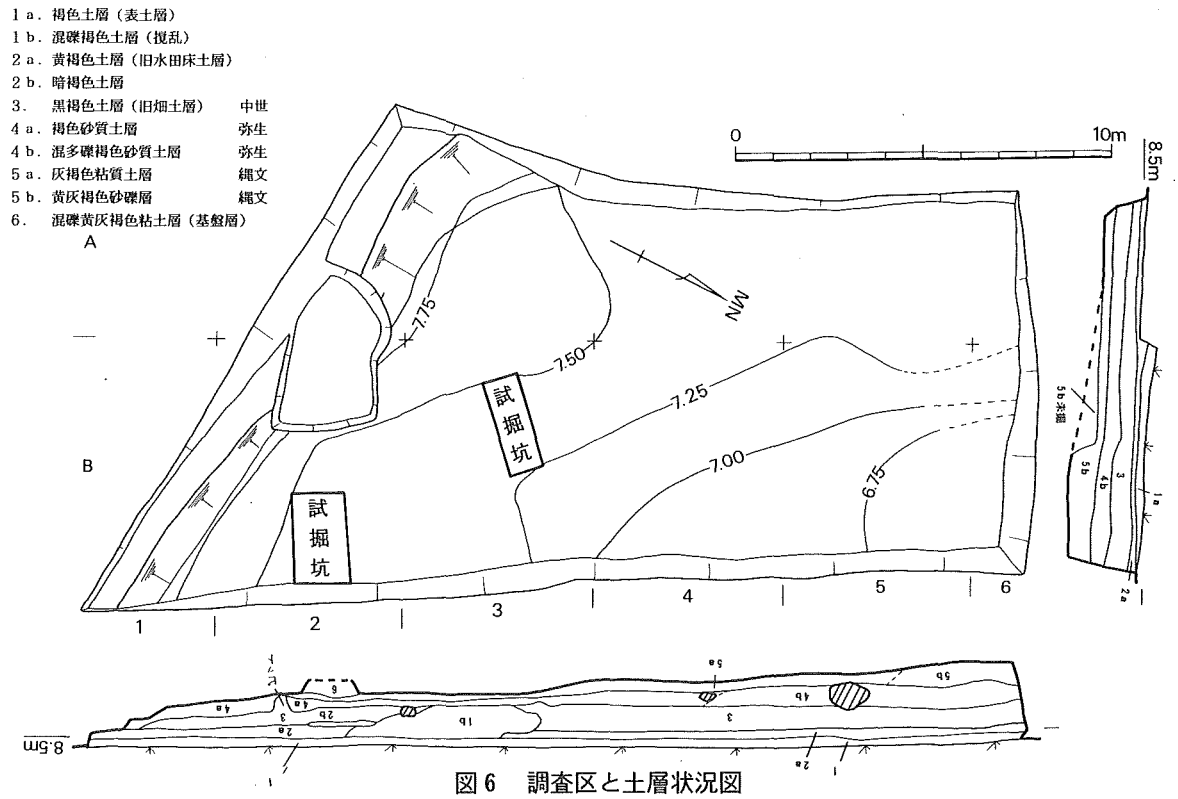


図6　調査区と土層状況図

2．遺物の出土状況

遺物の出土状況は，後の項で詳細に報告するため，ここでは各層位で簡単に見ていく。

2層全体から弥生土器片2,526点，磁器片89点，石器135点出土した。2a層から滑石製石鍋片のほか，竜泉窯系青磁がかなり原形を留めて出土したことが特徴的である。3層では，弥生土器片が各層位中最多で，28,002点出土している。しかし，磁器片も最多の589点検出し，弥生時代から中世の撹乱と思われる。ほかに，石器が1,197点出土した。4層は，弥生土器が主体として出土しているが，縄文土器もわずかに混在し，土器は合計13,060点を数える。また，石器は1.152点であったが，3層と内容は全く変化がない。剝片石器に関しては，縄文時代晩期の特徴を残したものがあり，弥生後期の土器との関連が注目される。一方，陶磁器は3層に比較して極端に減少し，79点のみである。5層は全体的に遺物数が減少し，土器片1,107点，磁器片2点，石器246点出土した。縄文土器は弥生土器以上に摩耗しており，その数量も微々たるものであった。

B地区西側については大礫が多く，遺物は他の調査区に比べ少ない。

遺構については，3層を掘り込む池状の落ち込みと，4層に柱穴と思われるピットが数基検出されたが，池状落ち込みには弥生時代の遺物が，ピット内には遺物の存在が認められず，各層で遺物を取り上げた。

Ⅳ．遺　　物

1．土　　器

（1）縄文土器

縄文時代の遺物は4～5層から22点出土した。いずれもかなり摩滅し細片であるため，土石流等による2次堆積であると考えられる。また，全て粗製である。

1は非常に摩滅が激しいが口縁部に3～4条の沈線が走り，色調は黒褐色を呈する。晩期前半の特徴を持つ。2は口唇部にナゾリ条痕，外面は横方向に，内面には斜めに走る条痕を持つ。色調は外面が灰褐色，内面が褐色である。縄文後期から晩期にかけての特徴を示している8　3は，浅鉢の口縁である。調整は不明だが，色調は灰褐色を呈する。4・5は鉢の胴部である。4は，外面に2と同様のナゾリ条痕が施してある。胎土に滑石を含み，内面の調整は横方向の条痕後，ナデを施す。色調は，外面が赤みがかった灰褐色，内面が淡赤褐色である。5は，D字形の爪形文が胴部に巡り，非常にもろく，色調は外面が黄褐色，内面が黄白色を呈する。

参考文献

小林達雄他編『縄文文化の研究4』雄山閣

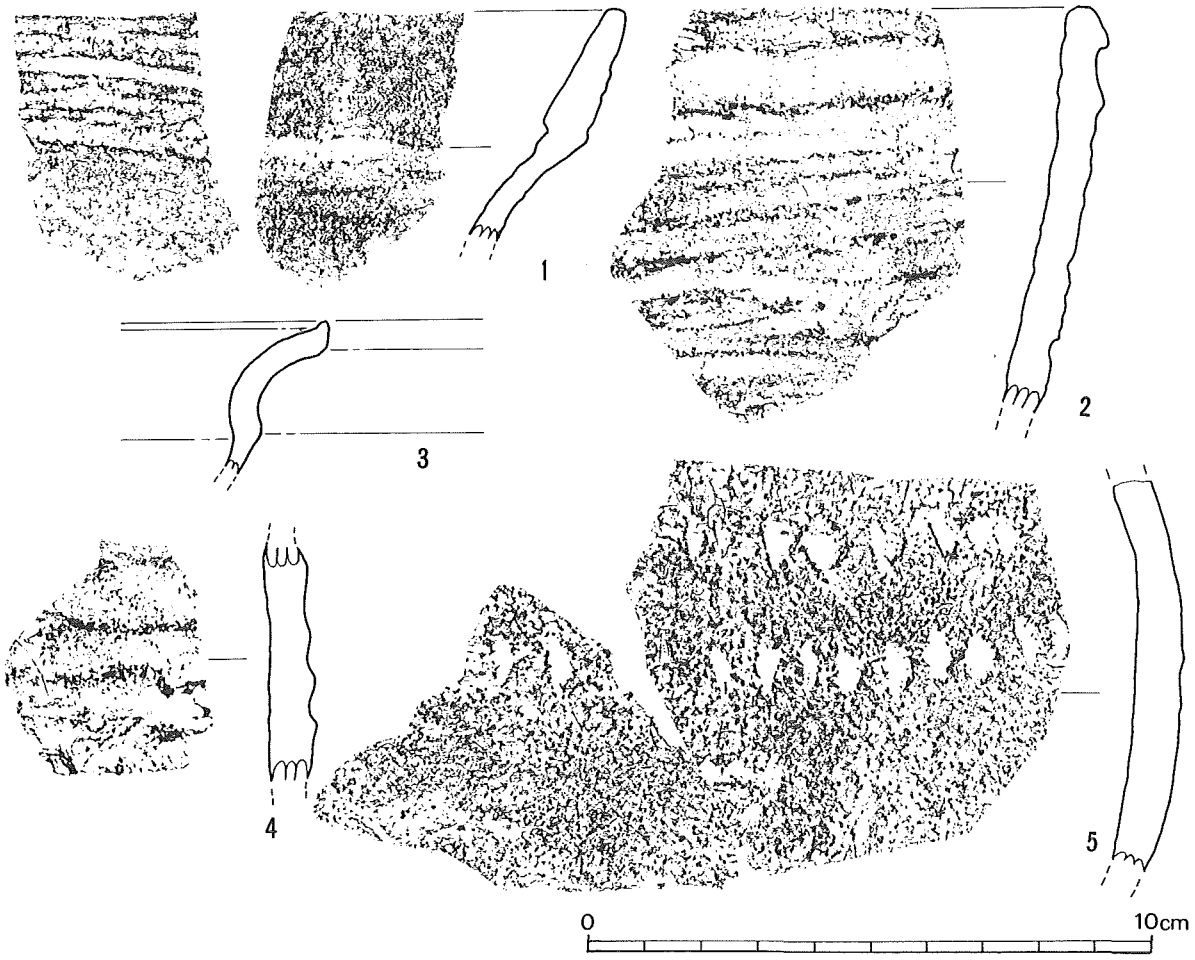


図7　縄文土器（図版）

（2）　弥生土器・土師器

弥生土器・土師器はパンケース56箱分が出土した。これらはB地区出土遺物の量の90％以上を占めるものである。土器はｂ２・ｂ３・ｂ４区の２層～４層にかけてが最も多量の遺物を包含していた。しかしながら資料はほとんどが細片で，著しく摩耗したものが多く，後世の陶磁器類も同じ層に包含している。よってこの包含層は二次的な堆積によるものと判断できる。

土器の時期は，わずかな中期中葉と古墳時代初頭のものを含むほかは後期中葉から終末期までの在地系の土器がほとんどを占める。この主体となる土器群は，層位的に分離できる傾向はみられない。５層になると遺物の量はわずかであるが相対的に縄文土器の量が増加し，弥生土器は減少するが，上層のものとの時期的な隔たりはない。以上から，弥生土器は本来さほど時間幅のなかった土器群が数次にわたって過去や後世の遺物と撹拌されながら堆積したものといえよう。

【甕】口縁部と胴部とをわけて説明する。

口縁部を形態から分類すると，１類：中期に盛行する鋤先形口縁の形態に繋がるもの（９，13），２類：口縁部がやや外反し，胴部があまり張らない形態のもの（１～３，７，14），３類：口縁が内側に明瞭な稜をもって直線的に立ちあがり，口唇部が角ばるもの（16～19），４類：布留式および布留式的な口縁部のもの（４，５，６）と分けることができよう。１類と４類の存在から土器の時期幅はかなりあるといえるが，検出された資料の大半は２・３類およびそれに近いく字形口縁である。１，２は口縁部が隅丸に角張り，肩部が張り気味の胴部となる器形で，２は石英の細礫や雲母を含み表面も比較的精美な作りである。肩部が張り気味の胴部となる。３は１，２に比べ短口縁で，内面の稜は緩い。外面には炭化物が付着している。口唇部は丸く収める。４は布留式の甕で，焼成はよく胎土の特徴の点でも搬入品であろう。布留式でも古段階に属する。５は頸部内外面に明瞭な稜をもち，口縁

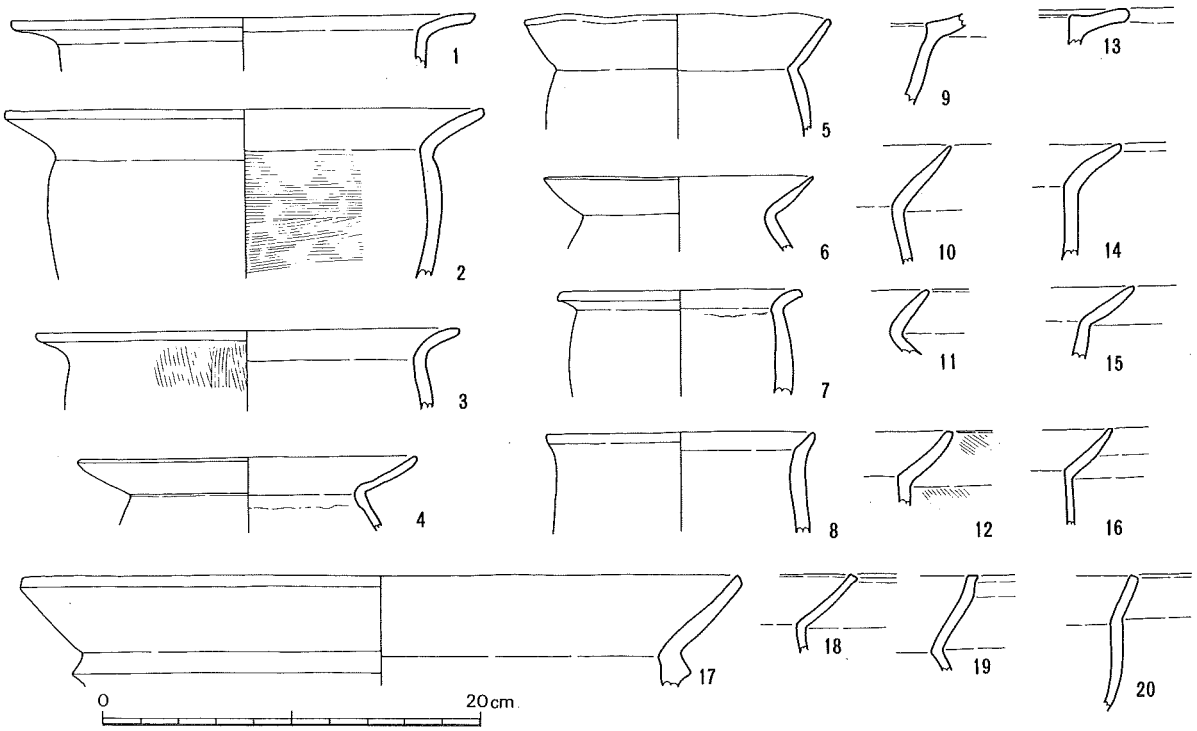


図８　弥生土器・古式土師器

部がわずかに内湾する。口唇部は隅丸に収められ，上面は水平でなくわずかに波打つ。これも在地的な布留系の甕と思われる。6も在地的な布留系甕であろう。口唇部は尖り気味で，口縁部はわずかに内湾する。7はわずかに雲母を含み，在地系の中では精美な作りである。頸部内面に接合痕を残す。口縁部は短いが強く外反し，口唇部の外面はわずかに肥厚して隅丸に角ばる。8は短口縁の甕である。横方向に短くつまみながら成形したような口縁部で，口唇部は器面内外に緩く波打つ。9は本来はもう少し内傾するかもしれない。頸部内面の直下は強い横方向のナデによって凹み，口縁部はわずかに内湾する。口縁部外側は粘土を薄く貼り付けて厚みを増している。10は単純な「く」字形口縁で，口縁部は直線的に伸び尖り気味の口唇部になる。11は均一な厚さで直線的に口縁部が伸び，端部は摩耗が著しいが隅丸に角ばる。頸部内面は稜を持たず，胎土に雲母を含む。12は頸部内面の直下にあらい横ハケの痕跡を持ち，口縁部はわずかに内湾して端部は隅丸気味に角ばる。外面には斜めハケが残る。13は須玖式の鋤先状口縁である。口縁部上面は凹み，端部は肥厚気味に丸く収める。焼成は良い。田崎博之によれば（田崎1985）須玖Ⅰ式新段階にあたろう。14は口縁接合部の内側に緩く稜をもつ。口縁部はわずかに外反気味で，直線的に伸び細く丸い口唇部になる。15も単純な「く」字形口縁である。16～19は3類とした口縁部である。全体に胎土は精良である。16は18よりやや内湾する。18は口唇部の外側がごくわずかにつまみ出される。19は18と同様に口唇部外側がわずかに外方へつまみ出され，口縁の中段が微妙に屈折する。17は3類の大形品である。頸部に断面三角形の突帯を持つ。20は口縁が直立ぎみに立ち上がる「く」字形口縁である。あまり肩の張らない長胴の甕になろう。

図＊は底部である。今回の出土土器の中では，明らかに平底の甕の底部と確定できるものはなく，また口縁部資料にみられた布留式甕の底部も，もともと少量しか存在しなかったのか確認できなかった。よってここで報告するのは全ていわゆる台付き甕である。ここでは底部の形態は，1類：低く不安定な上げ底状（1～7，9～12，14～18），2類：やや安定した上げ底状（8，13），3類：低く直線的に広がる脚台（23～27，29，30），4類：より長脚になり裾が広がる脚台（28，31～35）の4つに分類できよう。1・2類は上げ底状としたが，北部九州の中期前半の甕などに見られるしっかりした上げ底とは異なるものである。ここでは便宜上分類したが，1・2類は形態上はっきりした境界を引くことはできない。それは2類と3類の間も同様であるが，3類と4類との間には型式的には距離が認められ，時間的に幅があるものと思われる。4類は焼成がよく表面は黄白色を呈し，胎土の特徴も1～3類とは異なっている。しかしながら台付き甕の主流は1類から4類へと漸移的に変化するものと考えられる。1～4類は1・2類が黒髪式に前後すると想定すれば上限は中期末程度，4類が終末期以降も在地系土器として残るとしても古墳時代初頭程度で下限をなすと考える。

1は下面が凹んだ底部に外側から粘土を貼り付けていて，部分的にその粘土が剝離している。あるいはこの外面は擬似口縁かも知れないが摩耗が著しく確認できない。2も同様の作りでかなりいびつな形である。3は底部内面から棒状の工具で粘土を押し込んで充填し，短い台部を側面から貼り付ける。4は粘土板を下から貼り付けて底部を作る。胎土はきめこまかい。5は底部がごく薄く，側面から粘土を貼り付けて低い台部を作る。6は分厚い底部に外側に小さく突出した不安定な台部が付く。

7は2と同様に上部から粘土を棒状工具で押し込んで充填し，その後から側面にいびつに粘土を貼り付けて台部を作る。8は低いが厚めのしっかりした台部で，短い脚台を付加して底部の内外面から棒状工具で押圧したあとが残る。9は摩耗著しいが外面にわずかな縦ハケを残す。底部はごく薄く粘土を貼り付けて作られる。10は5，7と同じく底部内面から粘土を充填し，さらに側面から粘土を貼り付けて低い台部を作る。11も粘土を側面から貼り付けて低い台部を作る。12は底部に外側から粘土を貼り付けて低い台部を作る。13は底部内面がわずかに凹み，外面は縦方向，脚台部内面には横方向の，原体を同じくすると思われるハケ目がのこる。14は下面から粘土を充填して底部が作られ，底部内面はナデが施される。胎土は精良で，甕口縁部の3類としたものと似ている。15は底部は薄く，内面から下へ押したようにへこんでいる。胎土は比較的きめこまかい。16は大きさは異なるが11に似た成形である。外面には縦ハケをわずかに残し，底部内面には棒状工具の押圧痕を残していびつである。17は底部の上下面から粘土板を貼り付け，側面からさらに粘土を貼り付けて低い台部を作る。18は底部

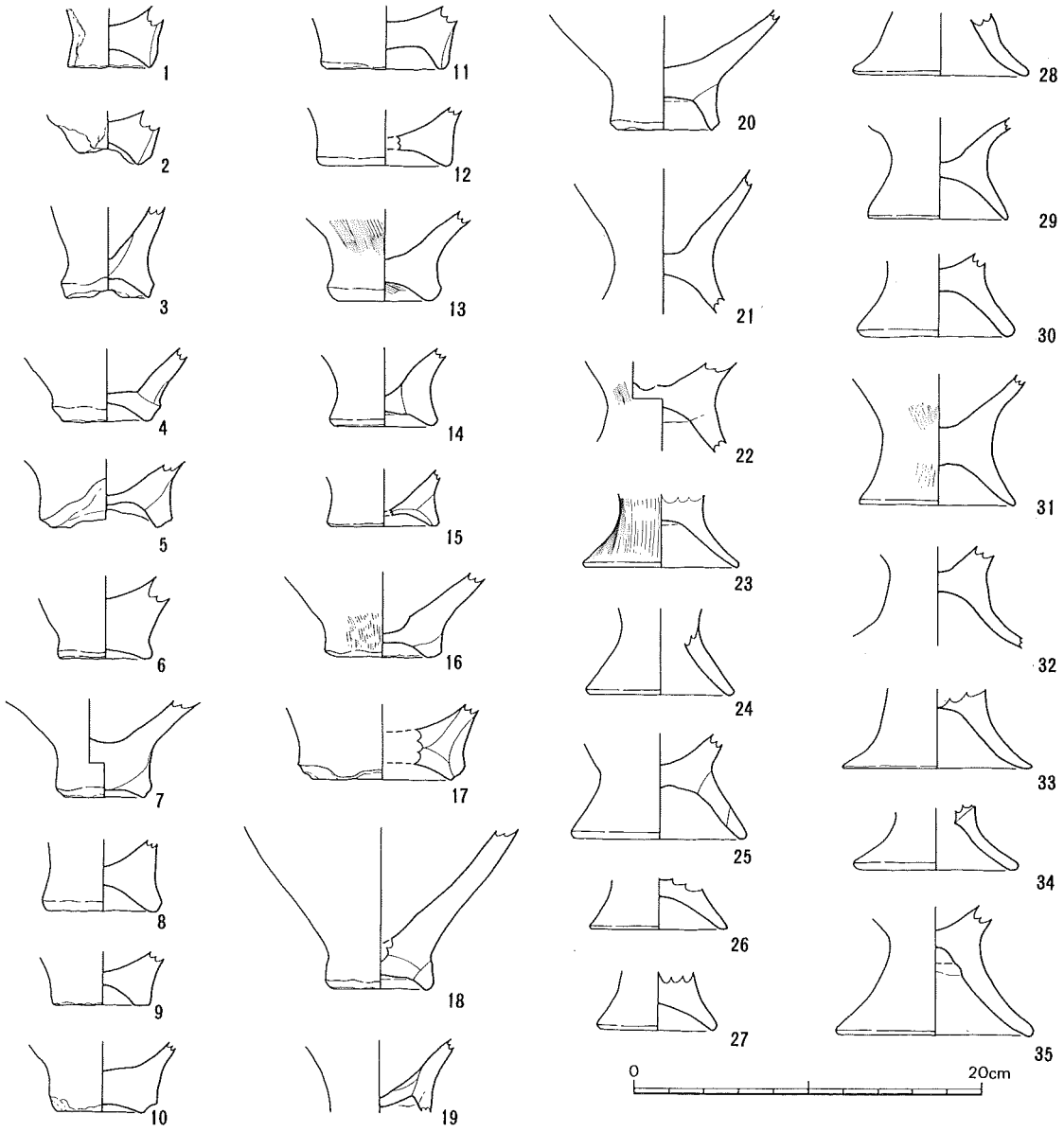


図9　弥生土器・古式土師器

下面から粘土板を貼り付けてさらに低い台部を接合する。19の器形は5のようになるであろう。20は18と同じ器形だが脚台はやや高い。21は胎土は比較的精良で外面と脚台部内面は丁寧に作られている。底部内面には中空の棒状工具を押圧したような痕が残る。脚台の端部は丸く収める。22も底部内面に棒状工具の押圧痕がある。外面にはわずかに縦ハケを残す。23は外面に縦ハケが施され，脚台端部は隅丸に角ばる。24は砂粒を含むが胎土はきめこまかく焼成は良い。脚台端部は角ばる。内外は丁寧なナデである。割れ口は擬似口縁状を呈し，脚台が底部に接合される成形技法が観察できる。25も24と同様の器形と成形だが24に比べ粗製である。脚台端部は丸く収める。26，27は低めの脚台が直線的に伸びて，端部は先細りながら丸く収まる。脚台部内面はボウル状に成形される。28は底部は欠損するが焼成は良好で4類である。29は脚台内面がボウル状で，端部は丸く収まる。底部内面には棒状工具による押圧痕が残る。30は24，25と同じ器形で，脚台端部は肥厚気味に丸く収める。31は29と器形や胎土の特徴を同じくするがより大形のずんぐりした器形で，脚台が緩やかに外反して開く。底部内面には棒状工具による押圧痕が残る。底部下面は中央の部分が小さく突出し，その突起を中心にして直径4㎝くらいの範囲でやや暗い色調を示し，あるいは焼成の際のあてものの痕かも知れない。胎土は比較的きめこまかい。32，33，35は脚台がラッパ状に外反して開き，ほぼ同じ器形だが大きさがわずかに異なる。32は底部内面に棒状工具の押圧痕を残す。35は32，33に比べやや長脚で，底部内面と底部下面とに同じ棒状工具による押圧痕を残す。

【壺・その他の底部資料】口縁部と底部にわけて説明する。

口縁部資料では複合口縁，短口縁などがある。これらは『今福遺跡Ⅲ』（宮崎，1986）で示された分類のバリエーションにほぼ含まれる。ほとんどが細片のために口縁部形態と胴部・底部形態の相関を知ることができない。複合口縁は，1類：袋状口縁の形態を引くもの，2類：頸部が内湾ぎみに急激に広がり，複合口縁が内傾して立ち上がるもの，3類：頸部が2類よりも立ち上がり，複合口縁が直立するか外傾するものなどがある。ここでは分類順に説明する。

1類にあたるのは2，18，21である。いずれも胎土は精良である。2，18は同じ形態の大小の土器の口縁部である。口唇部直下が内湾し，口唇部の丸さが強調される。21はごく小さな袋状口縁である。1類とした土器は細片ながらも一定の量が存在しており，在地的な祭祀用土器であったと思われる。

2類とするものは1，4，7，12である。1は複合口縁内部に強いヨコナデによる凹凸がある。焼成は良い。4は1よりやや小型だが同じ特徴を持つ。12も同様の特徴で，頸部内面にヨコハケを残す。7は2類の中では小型で，形態も頸部が立ち上がる点や複合口縁部の内傾がきつい点でやや異なる。複合口縁部の外面にはヘラ状工具によるものと思われる不揃いな斜線文が入る。

3類としたものは3，6，14，16，17，20である。これは直立する複合口縁を便宜的にまとめたが，さらに分類できる。3は比較的器形の残りが良い。胴部は森山町西ノ角遺跡出土の壺棺のような倒卵形になろう。複合口縁部は短く外反して先端は尖り気味に丸くなり，外面にはヘラ状工具を上下にナデつけて入れた刻み目がある。内面には多くの指頭圧痕を残す。6は薄手で精良な胎土である。すぼまった頸部から口縁が開き，口唇部は尖り気味に終わる。むしろ1類に含めるべきか。14は大形の複

合口縁壺である。おそらくは付け根が締まらない直立する頸部に，やはり直立する複合口縁部がつく。薄手で複合口縁部は長く伸び，口唇部は角ばる。古墳時代初頭に位置づけられる。16は複合口縁であるが口縁屈曲部外面に稜を持たず鈍い感じがする。口唇部は内傾して角ばる。17は16に繋がる器形で，口縁屈曲部外面には緩い稜を持つ。20は複合口縁部が外傾し，口唇部が角ばる新しい要素を持つ。5は直立する頸部から段をなして一次口縁が屈曲し，さらに短い開きぎみの複合口縁がつき，口唇部は厚みを増して角ばる。20もこうした器形を意識したものかと思われ，これらもやはり古墳時代に下るものである。

その他の資料を順次説明する。8，9は短口縁壺である。器形的には甕とすることもできよう。8は胴部は丸く，頸部内外面に稜をもち口唇部は丸く収める。9はなで肩の胴部で頸部外面に緩い稜が

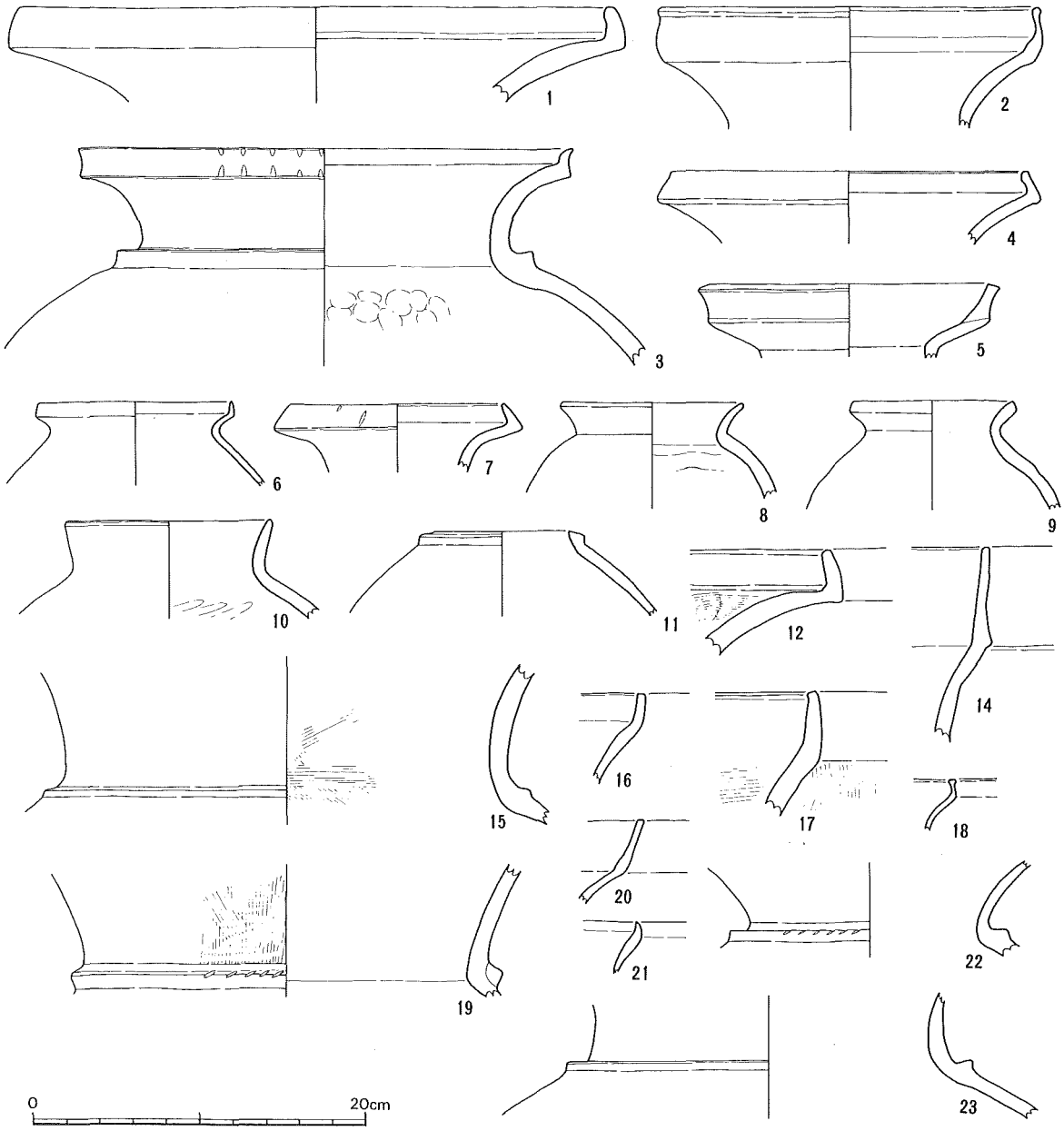


図10　弥生土器・古式土師器

つき，口唇部は角ばる。８，９は器形は異なるが内面の成形はケズリの後ナデを施しており共通している。10は短直口壺である。11は無頸壺である。胴部以下の器形は22などと同じであろう。15, 19, 22, 23は頸～肩部である。頸部がきつく外反するもの（22），頸部が直立気味のもの（23），その中間的なもの（15，19）がある。直立する傾向のものほど新しくなると思われ，口縁部形態の変化もそれに連動しよう。胴部片は今回図示していないが，頸胴界部に断面三角形の突帯を持ちあるいはその突帯上に刻み目を持つ22のようなものや，胴部突帯には断面三角形・かまぼこ形・台形などの粗い刻み目を持つものが多量に存在する。また中には一本の断面三角形の突帯を中央から横方向に上下に半裁してあたかも２本の突帯を貼り付けたかのように見せているものもある。

図＊＊の１～16は後期から終末期の壺形土器の底部である。個別の記述は省略するが，底部の丸底化の程度に注目すると，１類：わずかに上げ底状のもの（２，７），２類：縁が丸みを帯びた平底（３，５，６，11，12，16），３類：凸レンズ状のもの（９，13～15），４類：ほぼ丸底化したもの（１，４）と分類でき，１類から４類へと新しくなると想定できる。１類は小型品のみで大形品は検出されなかった。２類と３類は出土資料の中での大多数を占め，過渡的な形態のどちらとも峻別できないものが多い。だが12，16のように明らかに平底を意識したものは３類に比べると底部に厚みがない傾向がある。また15，16などの大形品は壺棺の可能性もある。15は特に器壁の厚みが不均一で粗雑な作りである。

そのほかの底部資料が17～26である。これらは伊木力の在地系の後期から古墳初頭の土器の系譜上にないものである。17の器形はこの一点のみの出土で，胴部下辺で一旦内湾し，丸みのある底部縁が

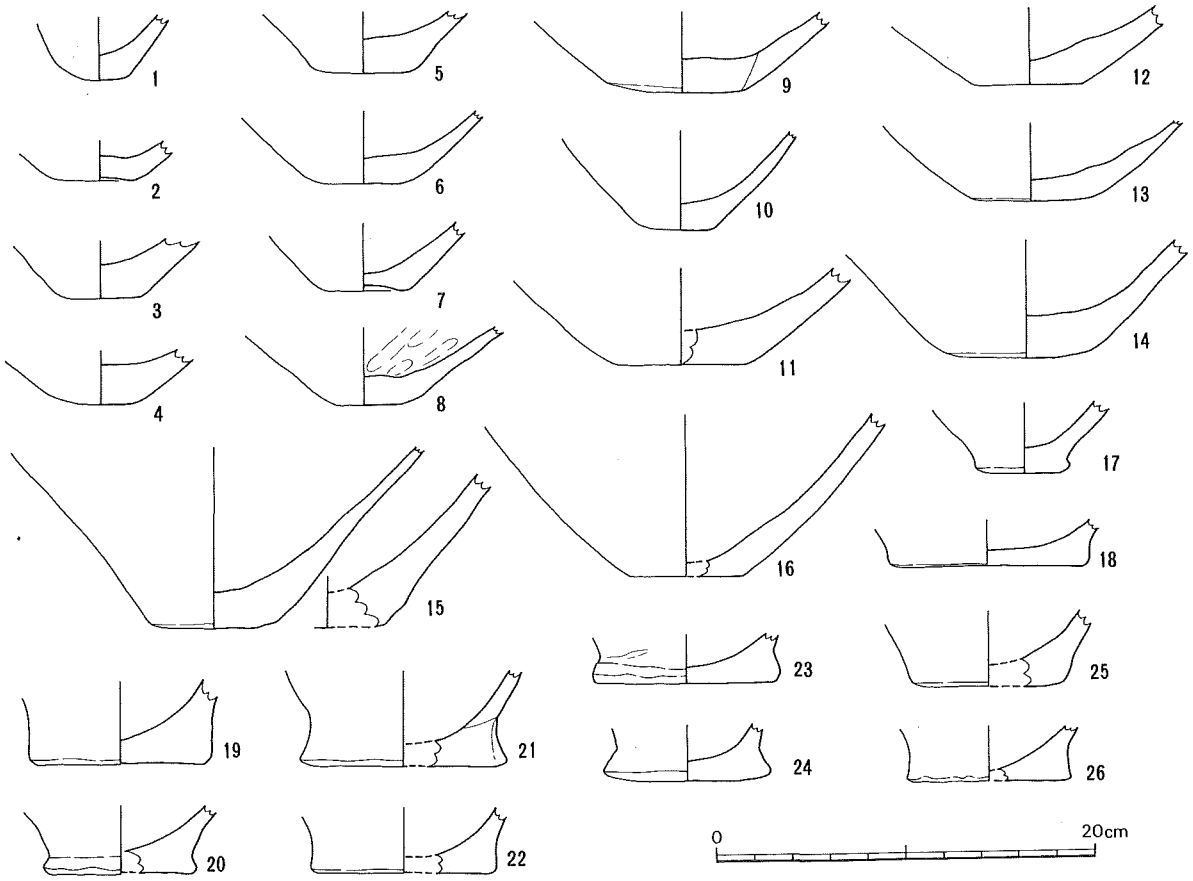


図11　弥生土器・古式土師器

突出して底部は小さく収まる。器形は壺になろう。便宜的に５類としておく。類例は『西ノ角遺跡』の図89，90の資料などがある。18～26は平底の土器の底部である。これらは特に21，24など器形的に弥生土器にするのを躊躇するものもあるが，焼成や胎土の印象から弥生土器の項で報告することにした。時期的には１～４類より遡る。単純に底部から胴部が立ち上がるもの（18，19，22，25，26）を便宜的に６類，底部縁から胴部へ外面が内湾してから立ち上がるもの（20，21，23，24，26）を７類とする。【高坏】坏部と脚部とにわけて説明する。

１～６は坏部である。１～５は後期後半から古墳時代初頭の時期にあたり，３が最も古く２が最も新しくなろう。１，２はいずれも坏上半部は下半部に対し反転して大きく伸び，端部は尖り気味になる。３は１，２に比べ坏上半部は伸びず，端部は丸く収める。下半部は浅い鉢状をなし坏屈曲部の外面の稜は内面の稜よりも低く位置し，丸みのある感じである。６は福岡県久保長崎遺跡７号住居や，長崎県口之津貝塚の土器に類例を求められる。器形的には久保長崎例の方に近いが，高坏屈曲部の外面に数状の浅い櫛描沈線文を施す点で瀬戸内系の土器の影響を間接的に受けたものかも知れない。１～５が３を除いては精良な胎土なのに対し，６は焼成がよくなく砂粒を多く含んで脆い。

11～19は脚部である。高坏部片の資料が限られるのに比べ，脚部片はまとまった量がみられた。これらを便宜的に分類し，その順に説明する。１類：長脚で脚頂まで中空のもの（９，12，14），２類：長脚で脚上部が中実のもの（７，８，10，11），３類：胎土が精良でやや短脚で中実のもの（13，18，19），４類：小型で胎土が精良な中空の脚のもの（17）。１類とした９，12，14は脚部の広がり方や内面の形態から12を区別することができる。９，14は脚頂部の内面がしぼられず筒状である。９は直線的に脚が長く伸びて裾部のみが広がり，14も同じ器形になろう。12は脚部内面に粘土の絞り痕を残し広がり気味に伸びる器形である。２類は形態上さらに細分できるが，型式差として捉えるためには坏

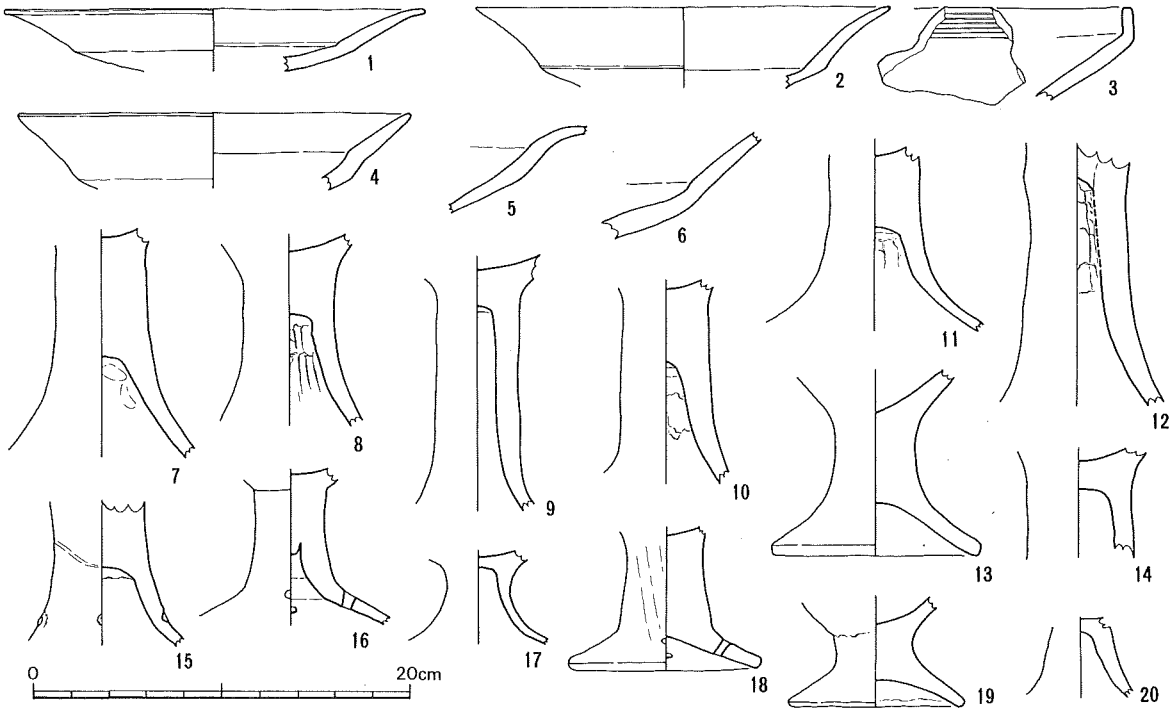


図12　弥生土器・古式土師器

部の器形との相関関係を知りうる良好な資料が必要であろう。脚部が中実になる高坏は北部九州では庄内系の高坏にみられ（柳田，1991），２類は典型的な庄内系の高坏の脚部ではないが，在地的な高坏に新来の要素が取り入れられた形態として考えたい。７のみは脚部内面がナデ調整されている。11，15は脚内面に粘土を充填した痕が残る。15は脚部の穿孔が貫通しないことが大きな特徴である。出土資料の中では２類が量の主体を占める。３類は１，２類に比べいかにも祭祀用の土器である。13は裾部の外形がラッパ状に開き，端部は面取りされて丸みを帯びる。19は短脚で，裾は直線的に伸び端部はやはり丸く収まる。18は筒状の完全に中実の脚部が屈折する裾部に穿孔が４つあり，端部は丸く収まる。脚部外面にはタテ方向の面取りが施される。４類の17は碗状の坏部がつくと思われる。薄手で焼成は良い。上記の分類外のものでは16がある。16は脚上半部が中実で器壁が厚く，内面が屈曲する形態から，外来系の高坏と思われる。古墳時代初頭に位置づけられよう。

【透し窓付き器台】

この器種は名称が統一されていないがここではいわゆる「鼓形器台」とは区別してこう呼びたい。今回検出された資料では，器高の中央あたりのくびれ部分に突帯を持つものはみられず，ほとんどが櫛状工具による沈線文か，ハケ目を装飾に沈線様に施したものであった。また透し窓は全て長方形で，島原半島でみられる円形透しはない。胎土や焼成をみると，砂粒を多く含むが薄手で焼成のよいもの，砂粒をわずかしか含まず精良で焼成はやや甘いもの，砂粒を多く含み焼成のよくないもの等がある。ここで図示したのは比較的残りの良い前二者だけである。１～３は胴中央部である。１，２は浅いハケ目状の沈線だが，３はそれよりも沈線が深い。４，５はあるいは同一個体か。横方向に櫛描沈線文を施した後にその上に鋸歯文を施す。６～９は底部として表現したがあるいは器台の上端部かもしれない。端部が反り上がる形態と（６，８，９），端部がスカート状に広がったまま終わるもの（７）がある。端部のまとめ方が両者では異なり，異なる部位かも知れない。

【その他の土器】

１は線刻を有する土器である。小型壺の肩部に３本１単位の線刻が２単位ある。非常に細い原体で

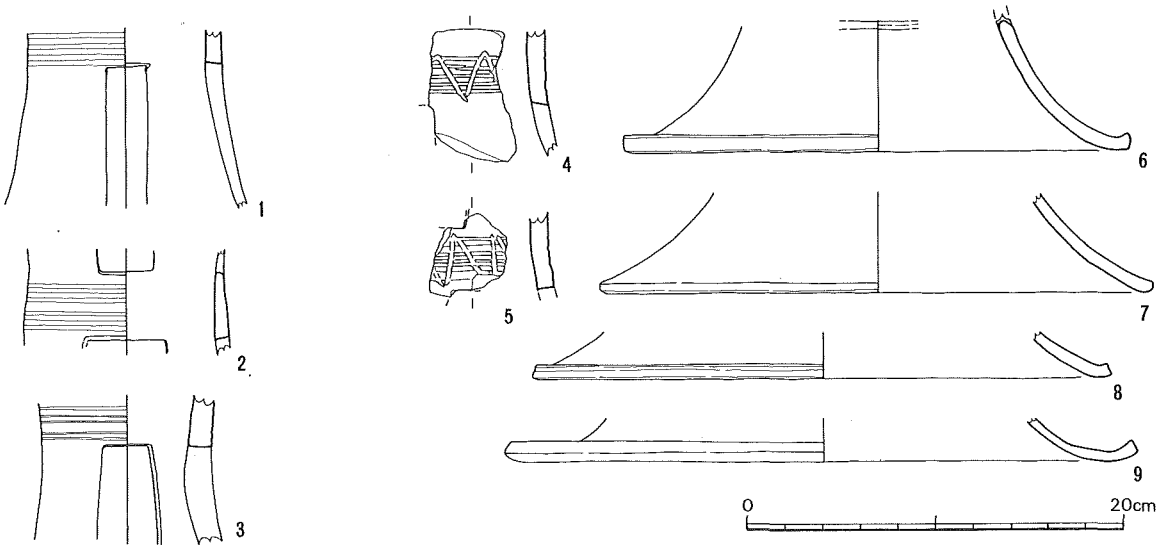
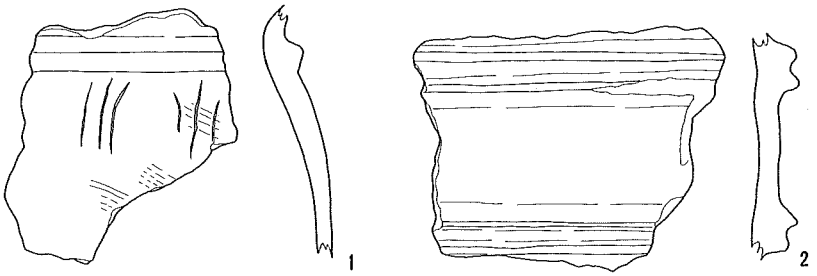


図13　弥生土器・古式土師器

刻んでいる。何をあらわしたかは不明だが，線刻の類例としては北有馬町今福遺跡の土器溜り出土例がある。焼成はよく，胎土も在地系のものとは異なる印象を受ける。２は器種は不明だが須玖式系の土器の胴部片である。須玖式土器は甕口縁部とこの破片の２点で，少量の搬入品であったと思われる。３は手づくね土器である。小さいが胎土は精良で焼成も良い。



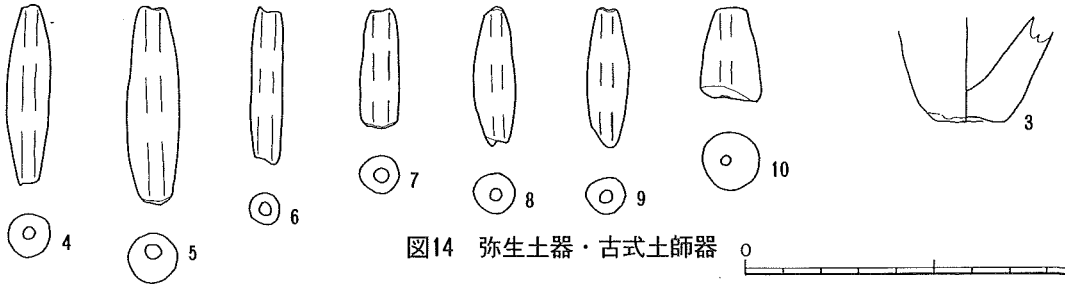


図14　弥生土器・古式土師器　0　10cm

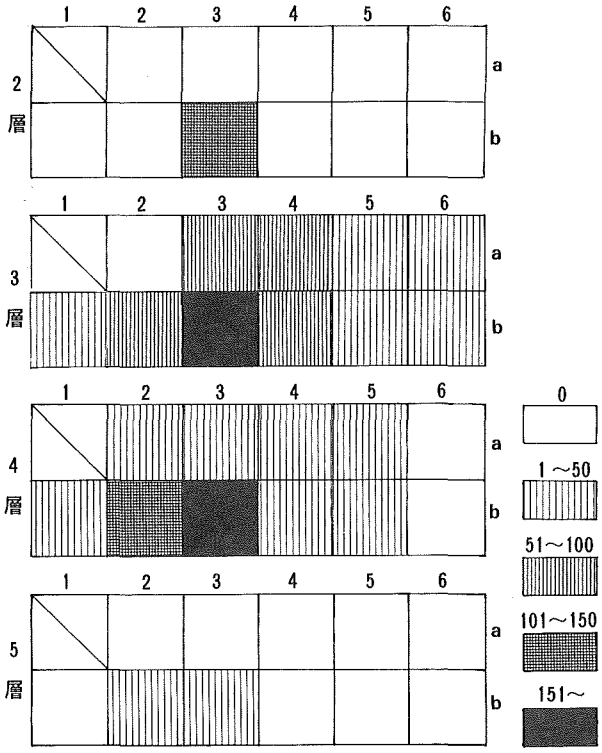


図15　調査区・層位別土器点数

【土器の数計結果】

弥生土器と古式土師器の遺存状態はよくなく，遺物の大半を占めるにもかかわらず一点をも完形に復元することはできなかった。こうした状態なので個体数を厳密に求めることは不可能だが，大方の傾向を知るために器種ごとに個体数を求める基準を設けて可能な限り数計した。壺，甕などは図15調査区，層位別土器点数一個体分の底部片，器台や高坏は一個体分と認定しうる破片群を一個体として数えた。認定できなかった器種もあると思われるが，器種構成中で大きな位置を占めるものではない。

図　は各調査区・層位毎の数計された個体数である。全体に遺物は散在するが，ｂ２，ｂ３，ｂ４区の34層に集中することは前述した。図は層位別の器種構成である。図中では，甕，壺，高坏，

透かし窓付き器台，文中で壺底部の項で６，７類とした平底土器を順にＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅとして示した。２層から４層では，甕が40～55％，壺が15～19％，高坏が10％前後，透かし窓付き器台が15～25％程度を占め，資料数の少ない５層を除いてはほぼ同様な構成比としてよいであろう。その一方，Ｅとして示した土器が下層になるに従い増加する傾向にある。この土器群は，時期の位置づけはできなかったが，弥生後期よりは時期的に一定の間隙を置いて遡るものと考えられる。中世の遺物などと混在して攪乱が明らかであっても，古い時期の遺物が下層ほど相対的に多く存在するという傾向があるようである。図は，壺底部の資料を用いて文中で設定した器形分類毎の量の比率を，層位ごとに示したものである。それぞれ微量しか検出されていない１，５類はともかく，２層から５層にわたりほぼ均一に２～４類が混在する。他の器種についても同様の状況といえよう。よって弥生土器・古式土師器の型式差のある土器が層位に関わりなく混在する状態から，もともと完全に攪乱されていた弥生後期～古墳時代初頭の包含層がさらに複次的に堆積したものであろう。

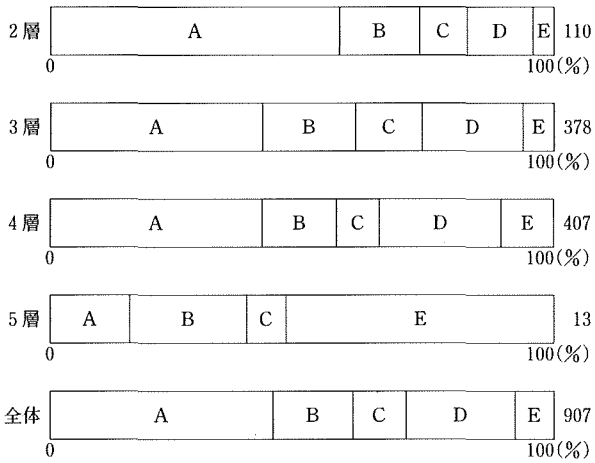


表２　弥生土器・古式古師器　器種構成

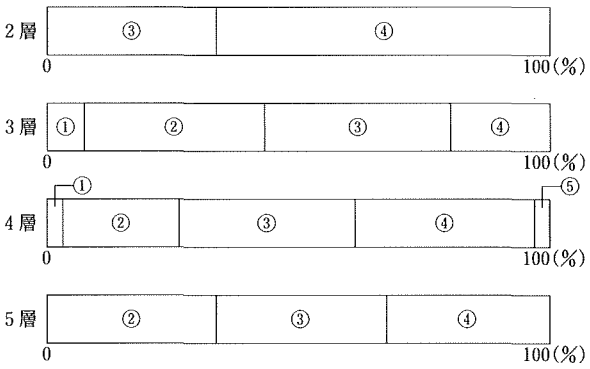


表３　壺底部細分器形の比率

参考文献

田崎博之　1985「須玖式土器の再検討」『史淵』122，九州大学文学部

松岡　史・宮原種生　1973「久保長崎遺跡」『福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会

松藤和人・諫見富士郎・古田正隆　1975『口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』，百人委員会

宮崎貴夫　1984『今福遺跡Ⅰ』，長崎県文化財調査報告書第68集，長崎県教育委員会

宮崎貴夫　1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集，長崎県教育委員会

宮崎貴夫　1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集，長崎県教育委員会

宮崎貴夫　1985『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第77集，長崎県教育委員会

柳田康雄　1987「高三潴式と西新式土器」『弥生文化の研究４　弥生土器Ⅱ』雄山閣

柳田康雄　1991「土師器の編年九州」『古墳時代の研究６　土師器と須恵器』雄山閣

2．石　　器

今回の調査では，約1,100点を超える量の石器群が出土した。大部分は黒曜石を主要石材とする剝片石器類であるが，石斧・石錘・磨石・石庖丁形石器などの礫石器類も一定の比率を占めている。本石器群の帰属時期については後述するとして，ここでは代表的な資料を図示し，個別の説明を述べる。

（1）剝片石器

【ナイフ形石器（第　図1・2）】

2点出土している。同志社大学調査時にも，1点の出土が報告されており，周辺に旧石器時代の遺跡が存在することは確実と思われる。ただし，周辺の表採等においても旧石器時代の様相を示す遺物は少数であり，キャンプサイト的な遺跡と考えられる。2点のナイフは，切り出し状を呈しており，1は分厚い縦長の剝片の打面部を基部として，裏面まで加工したものである。表裏面の剝離痕等からの観察では，素材剝片は分厚い横広のものを使用しており，表面の剝離面からもいわゆる縦長剝片剝離技術から逸脱したものである。その形態から，熊本県の狸谷Ⅱ石器文化のナイフ形石器に共通するものがあると思われる。2は灰青色黒曜石の横広の剝片を使用したもので，薄身のものに仕上げている。1と同様に，切り出し状の刃部を持っているが，素材剝片の在り方そのものは相違している。

【石鏃（第図3～16）】

石鏃未製品を含め，14点の出土がある。3～8は脚部をもたない平基のもので，すべて漆黒色の黒曜石を使用しており緻密な加工を施している。弥生の石鏃としては薄くて小型のものが多いように思われる。7～12・14については剝片の主要剝離面を看取できるもので，とくに11については，いわゆる剝片鏃とよばれる一群に相当するものであろう。また14については，表裏に剝離面が残る素材を利用し，周辺加工を施している。掻器状のものとも考えられる資料である。15・16については，石鏃の未製品として捉えた。16だけが灰青色の黒曜石を使用している。

【石匙（第図17～19）】

2点出土している。2点ともつまみ部分を打点とした，分厚い剝片を素材としており基表面に主要剝離面を残している。刃部は17が直線状を呈するのに対し，18は円弧状を呈し，素材そのものの形状をよく残している。刃部に平行してファシット状の剝離面を持つことも18の特徴であり，石匙としての機能を果たさなくなった際に，別の機能をもたせるべく両端からファシットを入れたものか19についても石匙を作成したものの，破損したたために再加工してドリルに転用したものである。

【その他の石器　第　図20～27）】

楔形石器・彫刻刀形石器・ポイント状石器・つまみ形石器等を図化した。20の楔形石器は，上下からの微細な剝離痕が顕著で，すべてのリングが密となっている。22は打面調整をおこなった後に側辺に彫刀面を作出したものである。素材剝片は，縦長剝片を使用しており，打面調整の在り方等から旧石器時代の遺物を彷彿とさせるが，壱岐の名切遺跡などからも多量に彫器が出土しており，縄文時代の後期の遺物としても捉えることができよう。25・26のつまみ形石器の出土や，11の剝片鏃などから考えてみても，縄文時代後期の遺物が混入している可能性がみられる。

【掻器　第　図28～34】

7点を図化した。黒曜石の大形縦長剥片を利用したものや，安山岩製の大形剥片を利用したものなどがある。黒曜石製のものについては，打面に対し，器体が大形になるかなり完成度の高い剥片剥離技術の中で，作出されたものと思われる。両側辺には刃部加工と共に，微細な使用痕が観察される。30は，安山岩の厚い剥片の縁辺に，急角度の刃部整形を施している。上部は分厚い剥片であるため意図的な折断であろうと考えられ，刃部が円弧状になるエンドスクレイパーとして使用したものとと思われる。31～34については両側辺，あるいは一側辺を加工したサイドスクレイパーで，薄みの剥片を使用したものや33のように，礫から剥離して加工したものなどがみられる。34については壱岐の鎌崎遺跡で採集されている，いわゆる鎌崎形スクレイパーとよばれる一群に近いものであろう。

【石核（第図35～41)】

石核は，礫面付着の小型のものが多く，縄文晩期的な様相をみせるものが多い。その剥離面等から考え合わせると，かなり小型の剥片を剥離したものと思われるが，その剥片に対応する石器等は看取できない。35・36・38は，打面を一回の剥離により作出した平坦打面のもので，36・37は打点を円周状に移動させている。打点を後退させて剥離しているため，打面上の景観は，鋸歯状を呈している。37・39・40は自然打面を利用しており，一側辺からのみ剥離を施したもので，全形はほぼ方形状を呈している。この石核も先の石核と同様に，打点を後退させて剥離作業をおこなっているため，打面は鋸歯状を呈する。剥離された剥片は，打面が三角形を呈する厚い寸詰まりのものが剥離されたであろう。41は，安山岩礫を使用したもので，礫の周辺から求心的に剥離をおこなった結果，断面が砲弾形を呈し，中央に礫面を残すものとなっている。剥離は交互におこなっているため縁辺は，波をうったようにＳ字状を呈する。

これらの石核の特徴から，大きく三つに分類が可能かと思われる。一つは，一回の剥離による平坦打面を作り出した後に，急角度で周辺をすべて剥離面とするもの。二つめは，背面に自然面を残し一端にのみ剥離面を作り出すもの，三つめとして自然礫の周辺を剥離していき，円盤状を呈するものである。(同志社大学の伊木力遺跡での石核の形態分類におけるⅣ－ｂ類に相当するものであろう)

剥片石器類・石核について事実関係のみ報告していったが，剥片石器の器種をみるなかで，共通性等については掴むことはできなかった。また，ここに挙げた石器類は定型化したものを掲載したのであり，器種構成そのものについて遍在性があるであろうことは歪めない事実である。剥片等についてはさらなる分析が必要であるが，全てのものを見た限りにおいては，寸詰まりの剥片に礫面を多く残すものが数量的に多いように思える。これについては，西北九州の縄文晩期にみられる，剥片剥離技術に通じるところがあると考える。これらの剥片剥離技術が，弥生時代の地方文化にどのように取捨選択されていったのかを考えるうえで，弥生時代の剥片石器を再考し直す必要性があると考える。

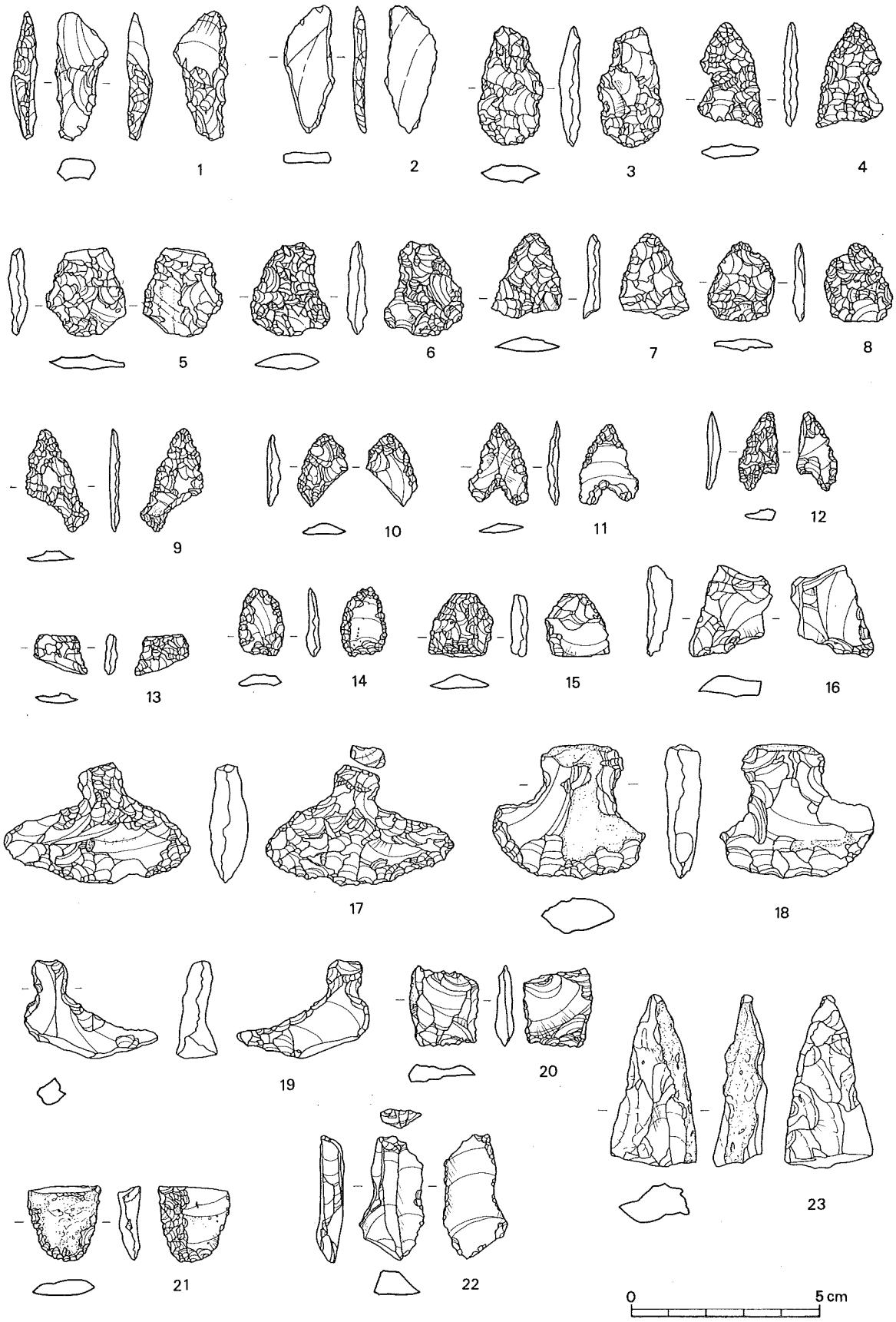


図16　剝片石器

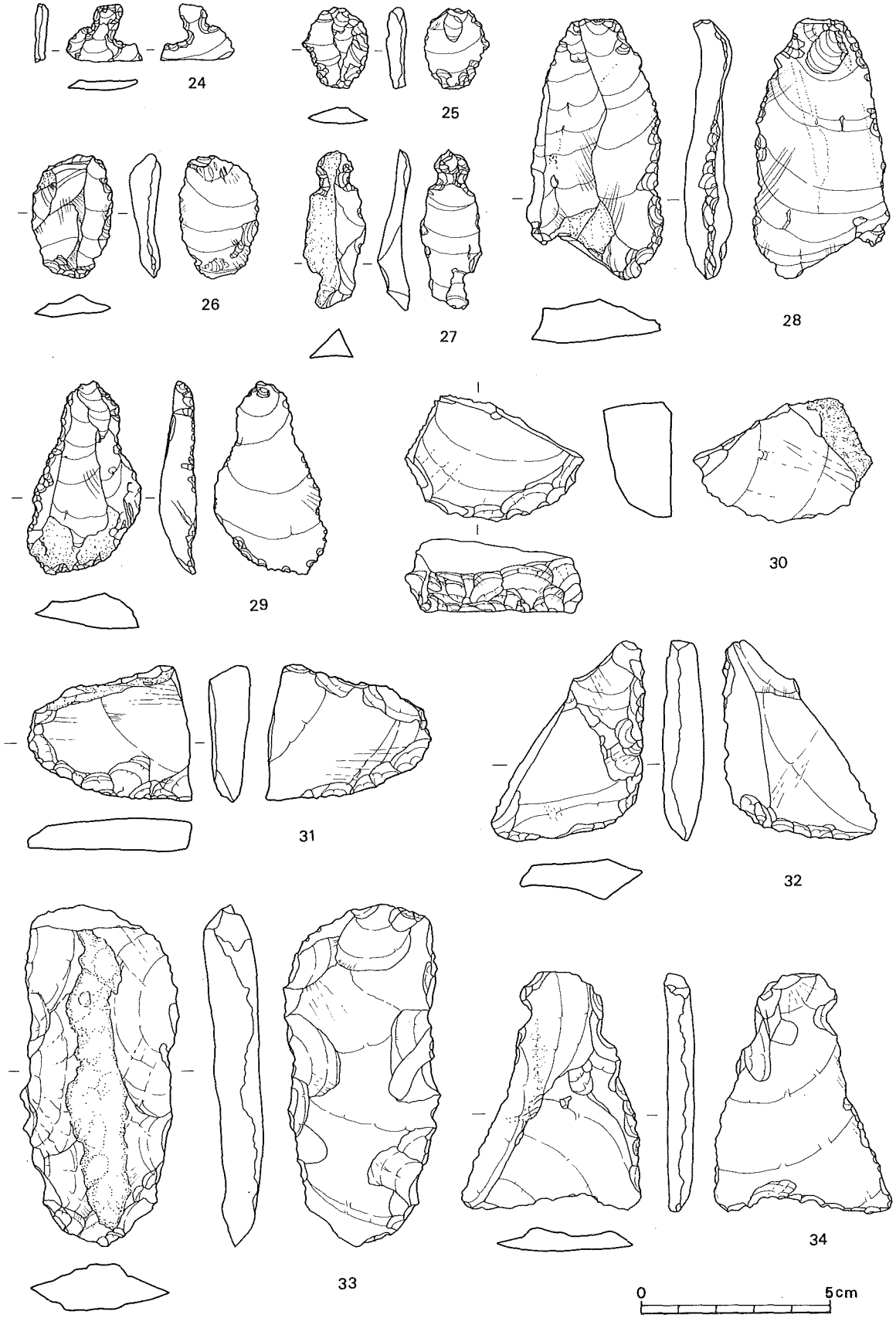


図17　剝片石器

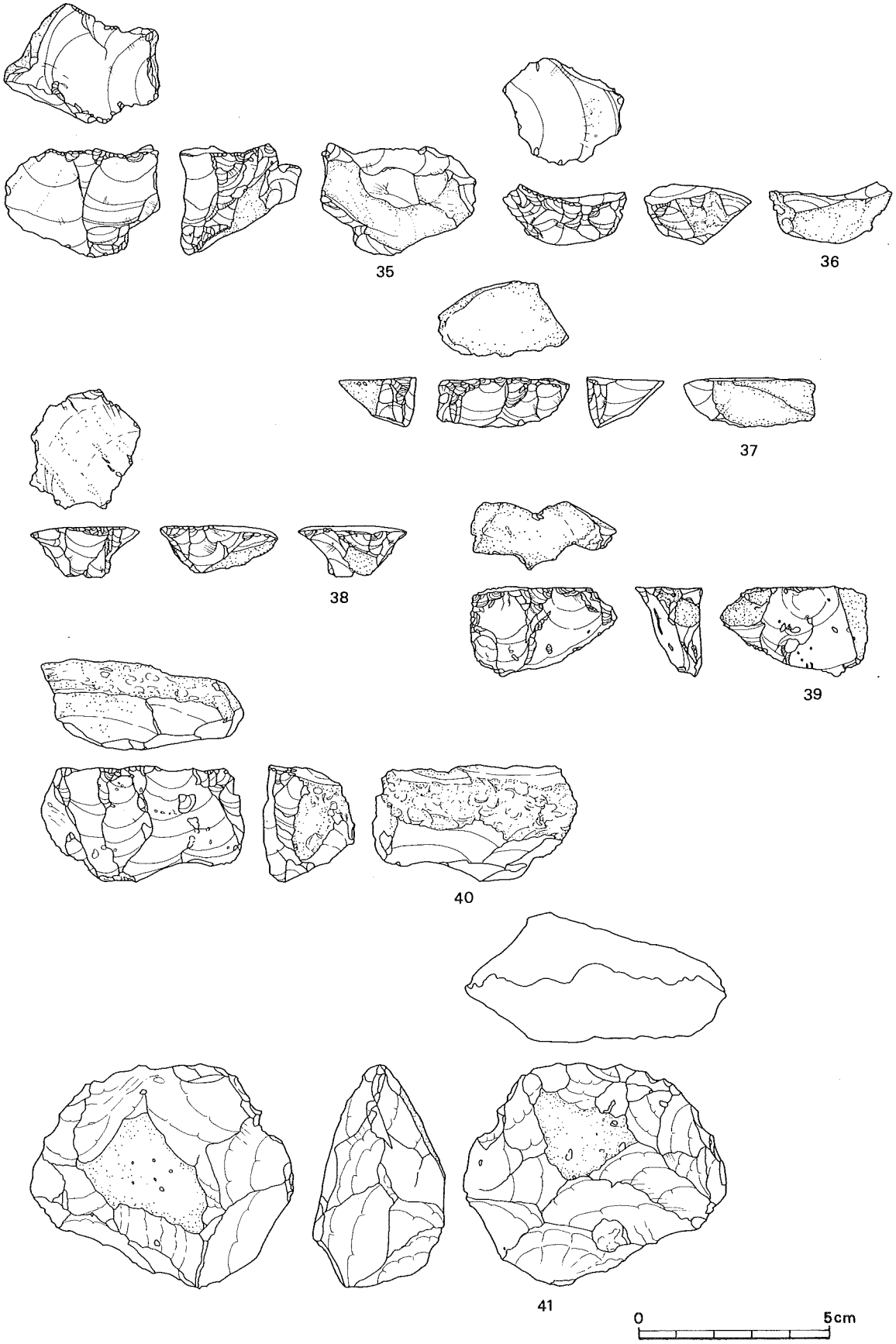


図18　剝片石器

（2）　礫　石　器

【磨製石斧（第1図1・2・5・6】

総数16点の出土があるが形態的には変化に富み，伐採具と思われる大形品からノミ状の小形品までを含んでいる。石材は蛇紋岩・砂岩・頁岩・ホルンフェルスなどが利用されている。これらのうち明らかに弥生時代の所産と思われる太形蛤刃石斧は3点のみで，方柱状石斧などは出土しなかった。なお，ほかの資料については帰属時期を明確にできない。以下，図示資料について個別に解説する。

1は緻密な頁岩円礫を素材とした太形蛤刃の石斧である。図正面中央および右側辺にアバタ状の敲打痕が認められ，加撃・敲打整形を施した後に研磨したことが知られる。かなり使い込まれており，刃潰れが著しい。2も1と同類と思われるが，細身でやや薄い。敲打整形は全面に施されているが，研磨は刃部片面のみに留まっている。基部は両側両面からの剝離により鈍尖頭状に加工され，刃部にも両面からの剝離加工が施されている。制作途中か刃部再生かは不明だが，いずれにせよ使用による欠損面ではなく，研磨に先立つ前処理加工と考えられる。表面は風化が著しいが，石質はホルンフェルスと思われる。5は磨製石斧に分類したが，石ノミとしての機能が考えられよう。小形細身で薄く，両側辺に剝離加工を施して整形した後，図の正面側のみを研磨して片刃を作出している。石質は2と同じくホルンフェルスであろうと思われる。6は蛇紋岩製磨製石斧の基部破片である。断面は薄く扁平で，基部や両側辺も直線的な作りである。刃部形状は不明だが，伐採具とは思われずノミあるいは手斧的な機能を有するものと考えられる。

【打製石斧（第1図3・4・7，第2図8・9）】

25点の出土があり，大半は第3・4層から出土している。総じて第3層から出土資料は小形または小破片が目立ち，第4層からの出土資料には完形あるいは大形品が多い。形態的には縄文時代晩期に特徴的な「扁平打製石斧」に分類されるもので，平面形は両側が平行する短冊形を呈するものが多い。素材は，輝石安山岩の板状節理による薄い岩片を活用している例がほとんどで，この石材は本遺跡周辺で容易に入手できるものである。

3は斜めに欠損しているが，本来は短冊形になるものと思われる。刃部にはわずかに磨耗痕が認められる。7も短冊形であるが，大形でかなりの重量がある。4は小形で，胴部に緩い抉り込みを有する。8は下半部を欠損するために全体形状が明らかではないが，胴部が大きく括れており，分銅形になるものと思われる。9は素材の形状を大きく変更することなく下端部の両面にのみ加工を施したもので，礫器とすべきかもしれない。

【石錘（第2図10～12）】

19点があり，第3～5層にかけて平均的に出土している。いずれも扁平・楕円形状の水磨円礫を素材とするもので，長軸方向の両端に加工を施している。石質は，大半が打製石斧と同様に在地系の安山岩（11・12）を用いているが，砂岩製（10）や緑色片岩製も散見される。

【石製品（第2図13・14）】

13は結晶片岩製の石製品である。両側辺は，平坦面に対して約45度の角度をもって研磨され，両

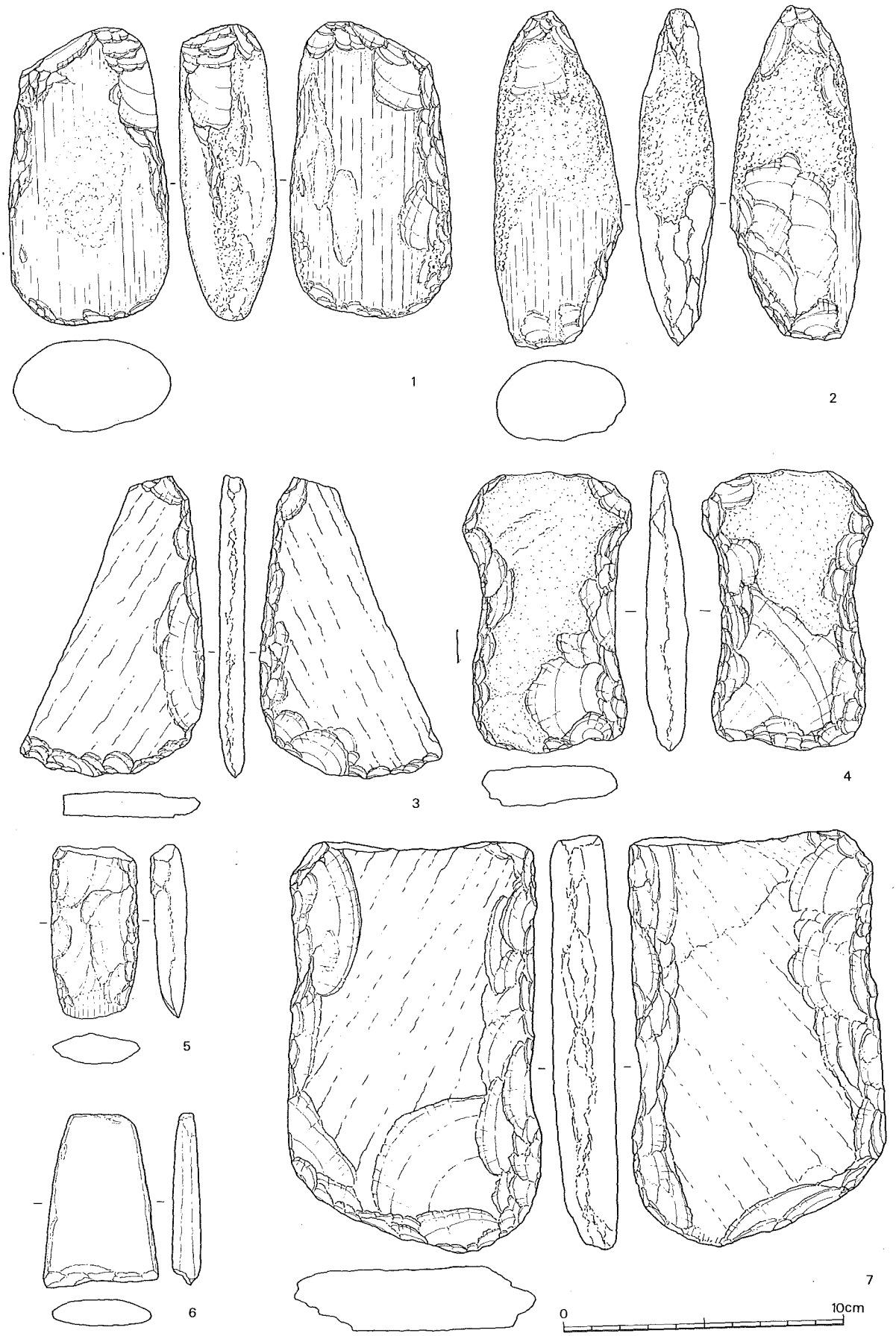


図19 礫　石　器

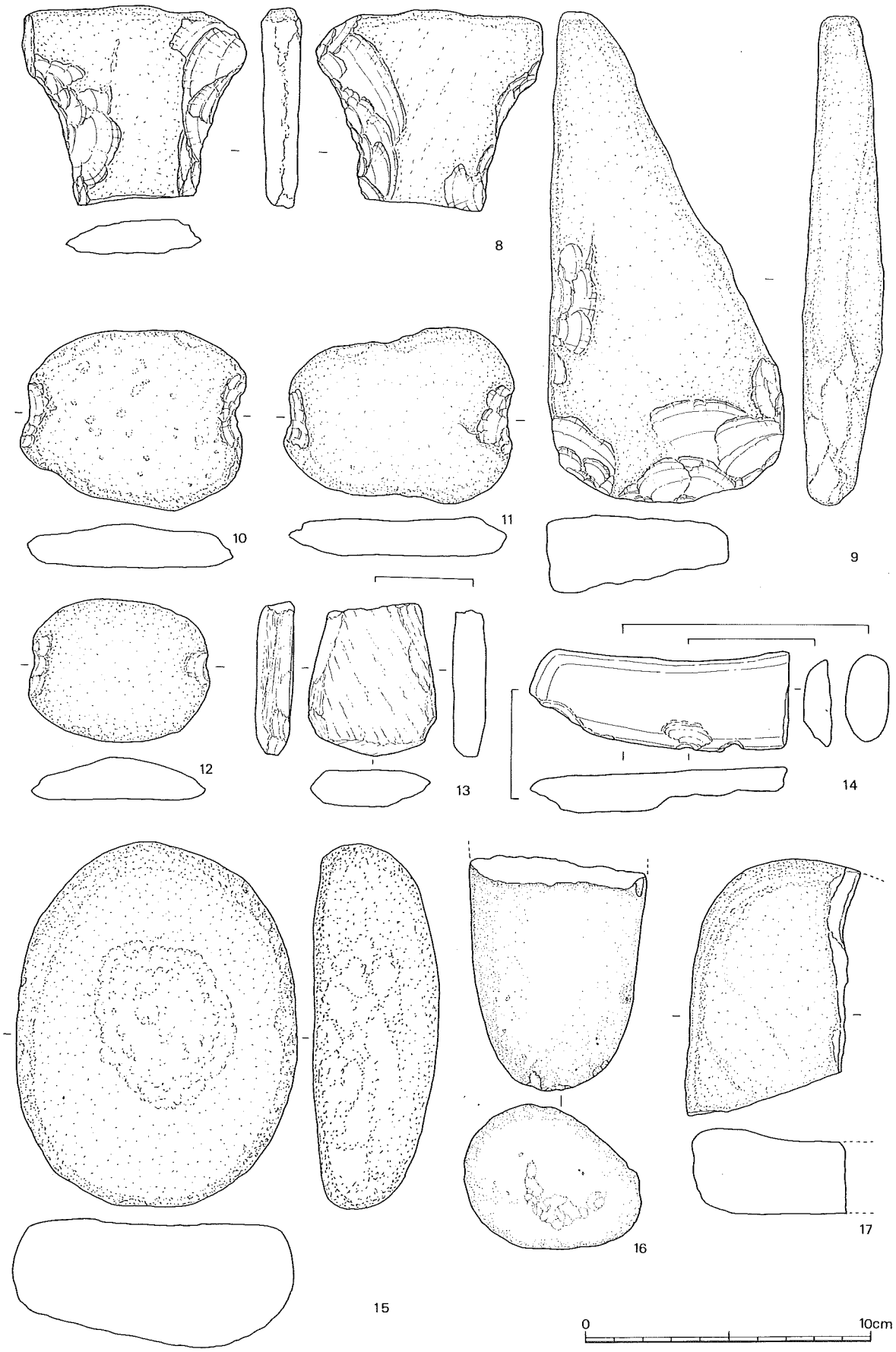


図20 礫　石　器

の交差部は直線稜を形成する。下端部にも複数の研磨面が認められるが，平坦面に対して直交気味であり，稜を有しない。縄文時代後期～晩期にかけて出現する「十字形石器」の可能性もあるが，ここでは用途不明の石製品としておきたい。

14は，黄鉄鉱を多く含む緑色片岩の礫を素材とするもので，周辺を研磨することにより緩やかな弧状に整形している。図の正面下部には2か所の小規模な抉り込みが認められるが，人為的な加工であるかは判然としない。

【磨石（第2図15)】

第3～5層にかけて計16点が出土している。石質は砂岩・安山岩・花崗岩・閃緑岩？など変化に富み，法量的にも卵大のものから長軸が10cmを越えるものまで様々である。素材礫が偏平なものは両面を磨石として利用し，周囲に鉢巻状のダメージを有するものが多いが，不整形の場合は特定の面だけを使用しているようである。図示した資料は中粒砂岩製で，両面がよく擦るられているほか，図の正面中央部および周辺には多くのダメージが認められ，台石や敲石としても使用されたことを示している。

【敲石（第2図16)】

縦長円礫の下端部にダメージを有するもので，敲石と考えられる。安山岩製。

【砥石（第2図17)】

計7点の出土があり，いずれも砂岩製である。形態的には，小形・板状で研磨面を有するもの，比較的大形の楕円形礫を素材として石皿状を呈するもの，大形で磨製石斧を研磨したと思われるような大きな曲面（作業面）を有するもの，の三種がある。図示例は細粒砂岩製で，大半を欠失しているが本来は隅丸方形の石皿状になるものと思われる。図正面はわずかに窪んでおり，研磨作業によって生じたと思われる段差が認められる。

【石庖丁形石器（第3図18～23)】

砂岩あるいは安山岩などの板状岩片を素材として，一側辺に刃部を作出したものを一括する。大分県二本木遺跡で「石庖丁形石器」として報告されている資料（第3図A～C）に酷似するため，本稿でもこの名称を使用している。合計9点が出土しており，大形の一群（18・19）と小形の一群（20～23）とに分類できる。前者は第5層からのみ出土しており，後者は第3～4層の出土である。いずれも耐風化性の低い石材を利用しているため軟らかい印象を受けるが，製作当時は相応の鋭利さを有していたものと思われる。

18は砂岩製で，両面加工により刃部を作出している。両側辺は折（切）断面を残しているが，上部は折（切）断面を打面として片側にのみ二次加工が施されている。この加工は刃部作出とは思われず，むしろ厚さを減じることを目的としているようである。刃部には使用痕と思われる摩耗が認められるが，同様の摩耗は，図正面の最も高い部位にも細長い帯状になって残されており，また上部の折（切）断面と平坦面とが交わる稜部にも観察される。19は安山岩製で，側辺の一方にも両面加工が施されていること，上部折（切）断面からの剝離加工が両面に及んでいることを除けば，18と同様である。20

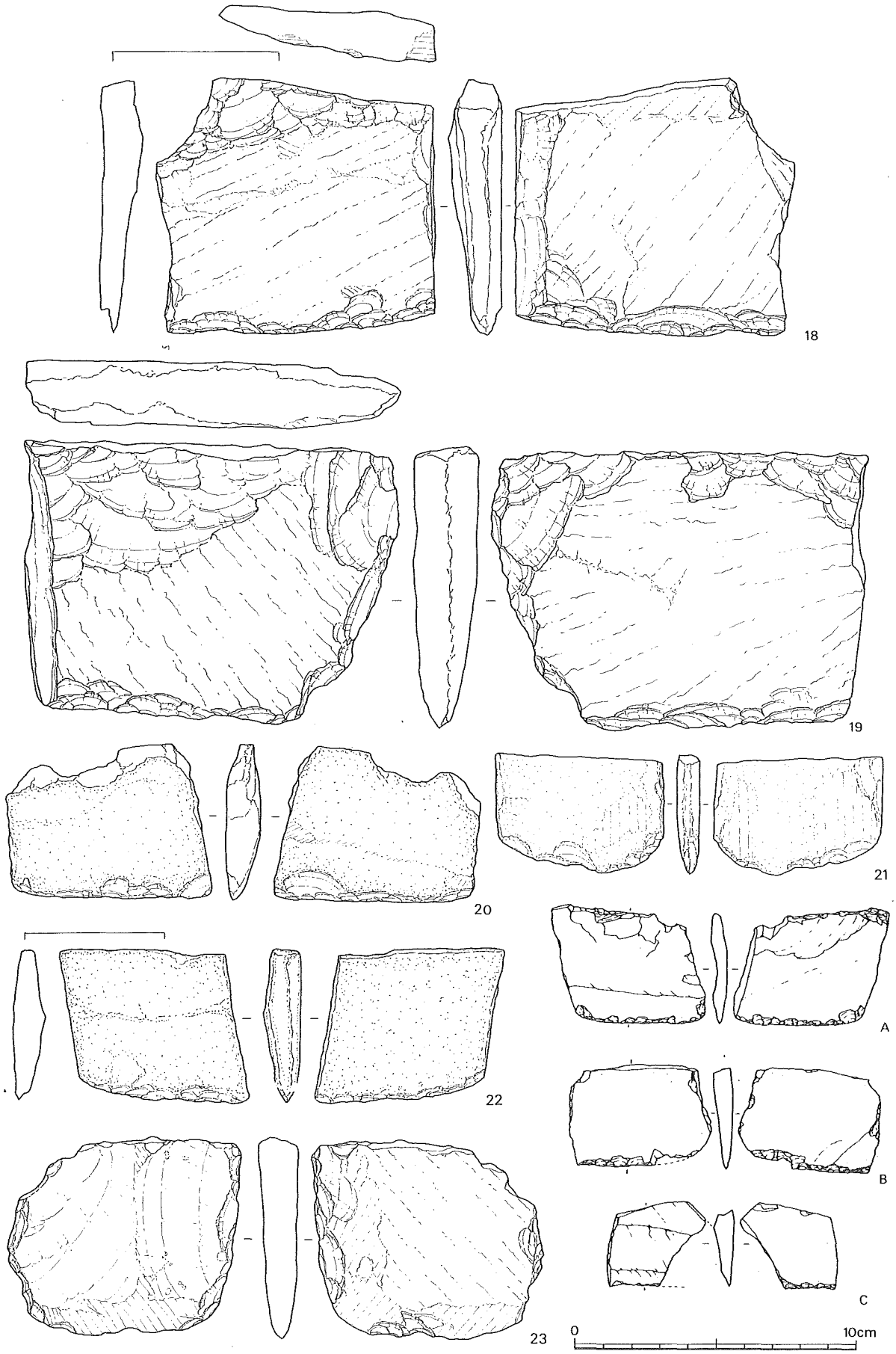


図21　礫　石　器（参考資料A～Cは、1/3）

は両面からの加工で刃部が形成され，両側辺および上面は折（切）断面を残している。刃部はかなり使い込まれており，剝離面の交差による稜線を留めないほどに摩耗している。図裏面には，細長い摩耗痕が観察される。21は安山岩製の偏平な水磨礫を素材とするもので，両面からの比較的ラフな加工によって刃部を作出している。上面は折（切）断面で，両側辺にもわずかながら剝離加工が施されている。

22は，両側辺と上部に折（切）断面を残し，刃部にのみ加工を施したものである。平面形は平行四辺形を呈し，形態・法量・技術的な特徴などの諸点で参考資料Aに酷似するものである。図正面中央には稜が残っているが，石質が軟らかいために摩耗痕は観察できない。23は扁平打製石斧状の粗形を制作した後，刃部両面を研磨したもの。図正面の刃部に直交する稜線に細長い帯状の摩耗痕が観察されるなど，18や20に共通した特徴が観察されることから，石庖丁形石器に分類している。

参考文献

木崎康弘編　1987『狸谷遺跡　九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査』熊本県教育委員会

橘　昌信　1984「縄文晩期の石器 ── 西北九州における縄文時代の石器研究（六）──」『考古学論叢』

稲富裕和　1980「縄文晩期の石器製作について」『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会

福田一志　1980「縄文晩期の石器」『ケイマンゴー遺跡』長崎県文化財調査報告書　第52集　長崎県教育委員会

清水宗昭編　1980「二本木遺跡の調査」『大野原の遺跡 ── 大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書』大野町教育委員会

【鉄製品】

鉄製品は２点を図示した。１は漁労具と考えられるが，あるいは武器かも知れない。薄手で身部には両側に刃がついており，茎部は折損している。残存長は3.3cm，最大幅は2.4cm。２は有茎鏃の茎部であろう。残存長は2.85cm；残存最大幅は1.2cm。時期の確定はできないが，１，２とも弥生時代から古墳時代初頭の土器に伴う可能性がある。

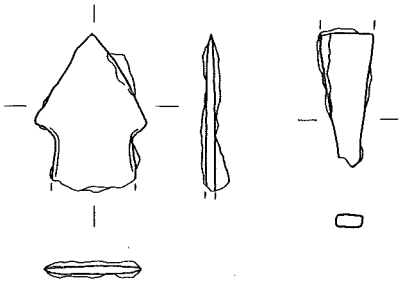


図22　鉄　製　品

表4　石　器　一　覧　表

伊木力遺跡B地点　石器一覧表（剥片石器）

図版番号	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土区	層　位
図16－1	ナイフ形石器	Ob(A)	3.4	1.4	0.6	2.5	b 5	Ⅴ層
図16－2	ナイフ形石器	Ob(B)	3.4	1.4	0.4	1.4	b 2	Ⅲ層
図16－3	石　鏃	Ob(A)	3.1	1.7	0.5	1.4	b 2	Ⅲ層
図16－4	石　鏃	Ob(A)	2.8	1.7	0.4	1.4	b 2	Ⅲ層
図16－5	石　鏃	Ob(A)	2.3	2.1	0.4	1.8	b 3	Ⅲ層
図16－6	石　鏃	Ob(A)	2.4	2.0	0.5	1.9	b 2	Ⅲ層
図16－7	石　鏃	Ob(A)	2.2	1.9	0.7	1.3	b 3	Ⅱ層
図16－8	石　鏃	Ob(A)	2.0	1.7	0.3	1.1	b 3	Ⅲ層
図16－9	石　鏃	Ob(A)	2.7	(1.7)	0.4	0.8	b 5	Ⅲ層
図16－10	石　鏃	Ob(A)	1.9	1.3	0.3	1.1	b 1	Ⅳ層
図16－11	石　鏃	Ob(A)	2.2	1.6	0.3	0.5	a 4	Ⅲ層
図16－12	石　鏃	Ob(A)	2.1	1.1	0.3	0.5	a 3	Ⅲ層
図16－13	石　鏃	Ob(A)	1.1	1.4	0.3	0.3	b 4	Ⅳ層
図16－14	石　鏃	Ob(A)	1.8	1.3	0.4	0.6	b 4	Ⅲ層
図16－15	石鏃(未製品)	Ob(A)	1.7	1.7	0.4	1.2	b 2	Ⅲ層
図16－16	石鏃(未製品)	Ob(B)	2.4	2.1	0.7	2.7	b 2	Ⅲ層
図16－17	石　匙	Ob(A)	3.2	4.9	1.0	10.3	a 6	Ⅳ層
図16－18	石　匙	Ob(B)	3.2	5.0	0.9	11.0	a 4	Ⅲ層
図16－19	石　錐	Ob(C)	2.5	3.5	1.1	4.0	b 2	Ⅳ層
図16－20	楔形石器	Ob(A)	2.1	1.8	0.5	1.7	b 1	Ⅳ層
図16－21	スクレイパー	Ob(A)	2.0	1.9	0.4	2.0	b 2	Ⅳ層
図16－22	彫　器	Ob(A)	3.4	1.7	0.7	3.4	b 3	Ⅲ層
図17－23	尖頭状石器	安山岩	(4.6)	(2.3)	(1.0)		b 3	
図17－24	つまみ形石器	Ob(B)	2.1	1.7	0.5	1.5	b 5	Ⅳ層
図17－25	つまみ形石袋	Ob(A)	3.2	2.1	0.8	4.2	b 2	Ⅳ層
図17－26	使用痕ある剥片	Ob(A)	4.1	1.7	0.9	2.9	b 3	Ⅲ層
図17－27	つまみ形石器	Ob(A)	6.8	3.5	1.2	2.8	b 4	Ⅲ層
図17－28	スクレイパー	Ob(A)	6.8	3.5	1.2	23.0	b 3	Ⅲ層
図17－29	スクレイパー	Ob(A)	5.1	2.9	0.8	10.4	b 4	Ⅲ層
図17－30	スクレイパー	安山岩	3.5	4.3	1.1	17.4	b 4	Ⅲ層
図17－31	スクレイパー	安山岩	5.2	4.0	1.1	17.6	b 3	Ⅳ層
図17－32	スクレイパー	安山岩	5.3	4.1	1.0	17.5	b 2	Ⅳ層
図17－33	スクレイパー	安山岩	9.0	4.1	1.2	52.6	b 2	Ⅲ層
図18－34	スクレイパー	安山岩	6.2	4.7	0.6	18.3	b 3	Ⅲ層
図18－35	石　核	Ob(A)	2.8	4.0	3.1	25.2	b 3	Ⅲ層
図18－36	石　核	Ob(A)	2.7	3.2	1.2	9.5	a 3	Ⅲ層
図18－37	石　核	Ob(A)	2.1	3.4	1.3	8.4	b 2	Ⅳ層
図18－38	石　核	Ob(A)	3.0	2.9	1.3	8.9	a 3	Ⅳ層
図18－39	石　核	Ob(A)	2.3	3.8	1.8	10.4	b 2	Ⅲ層
図18－40	石　核	Ob(A)	3.0	5.3	2.4	36.5	b 2	Ⅲ層
図18－41	石　核	安山岩	5.8	7.0		64.3	b 3	Ⅲ層

※黒曜石の場合(A)は漆黒色の黒曜石を，Ob(B)は灰青色の黒曜石を，Ob(C)は灰白色の黒曜石を表す。また，石核の長さは剥離作業面の高さを表し，幅は剥離作業面の幅を，厚さは打面部の剥離作業の面からの奥行きを表した。

石器一覧表(礫石器)

図19－1	磨製石斧	頁　岩	10.6	5.7	3.5	297.8	a 2落込	Ⅲ層
図19－2	磨製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	12.0	4.5	2.9	196.8	b 2	Ⅳ層
図19－3	打製石斧	安山岩	18.0	6.5	0.9	73.2	b 3	Ⅳ層
図19－4	打製石斧	安山岩	10.0	6.0	1.5	106.7	a 3	Ⅲ層
図19－5	磨製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	6.2	3.1	1.2	31.6	b 2	Ⅳ層
図19－6	磨製石斧	蛇紋岩	6.1	4.1	1.2	34.8	b 3	Ⅳ層
図19－7	打製石斧	安山岩	14.8	9.0	1.7	462.5	b 2	Ⅳ層
図20－8	打製石斧	安山岩	7.0	8.0	1.3	90.4	b 3	Ⅳ層
図20－9	打製石斧	安山岩	17.2	8.4	2.8	438.7	不明	Ⅳ層
図20－10	石　錘	砂　岩	6.2	8.0	1.3	109.6	b 3	Ⅳ層
図20－11	石　錘	安山岩	6.3	7.4	1.5	98.6	b 4	Ⅲ層
図20－12	石　錘	安山岩	5.0	6.3	1.5	71.6	b 3	Ⅱ層
図20－13	石 製 品	結晶片岩	5.3	4.5	1.3	46.0	b 3	Ⅳ層
図20－14	石 製 品	緑色片岩	3.5	9.0	1.4	65.5	a 3	Ⅳ層
図20－15	敲　石	安山岩	8.2	6.2	5.0	328.4	b 3	Ⅲ層
図20－16	磨　石	砂　岩	12.8	9.8	3.9	810.0	b 2	Ⅴ層
図20－17	砥　石	砂　岩	9.0	5.5	3.0	227.0	b 2	Ⅳ層
図22－18	石庖丁形石器	砂　岩	9.1	10.0	2.0	218.7	b 2	Ⅴ層
図22－19	石庖丁形石器	砂　岩	10.0	13.3	2.4	423.3	b 2	Ⅴ層
図22－20	石庖丁形石器	安山岩?	5.5	7.2	1.0	66.5	a 3	Ⅳ層
図22－21	石庖丁形石器	安山岩?	4.2	6.0	0.8	31.5	b 3	Ⅱ層
図22－22	石庖丁形石器	安山岩	5.5	6.8	1.3	61.4	b 2	Ⅲ層
図22－23	石庖丁形石器	安山岩	7.1	8.2	1.4		a 3	Ⅲ層

（3）　中世の遺物

B地点における中世遺物は，弥生の遺物の次に遺物量が多く，中国製輸入陶磁器，土師器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器などの国産陶器，滑石製品等が出土している。同志社大学の調査地点やA地点より数量的には多く出土しており，この高台部分に中世集落の中心部があったことが予想される。時期的には，12世紀～14世紀代までの遺物が主体であり，文献上に出てくる伊木力氏よりも遡る時期のものについては，今後のこの地域の歴史を考える上で，重要な資料となるものと思われる。

白磁（図23・24，1～39）

白磁は総数336片を数え，46点を図化した。1～10は口縁が玉縁状になる白磁碗で，すべて口縁部の資料である。山本（1988）分類によるⅣ－1類である。このなかでも1は灰オリーブ色を呈し，玉縁が他に比べやや小さく，胎土が緻密で不純物が少ないもの，7～10などのように淡黄色を呈し玉縁が大きめのものなどがある。11～13は横田・森田（1978）分類によるⅨ類－1類で所謂口禿げの碗である。

14・15については，碗Ⅴ類に相当するものと思われる。全体のなかでは数は少ない。17・18は体部が外反し口縁部が平坦になるもので，Ⅴ－4a・b類に相当する。16はⅤ－3b類と思われ，外面に櫛で施文するもので，本遺跡ではこの一点のみである。19～24は皿で，19・20は全体に施釉をおこなう口禿げ皿Ⅸ－1d類である。21は体部に強い屈曲部を持ち，外面下半部は露胎で，無数の轆轤整形痕が見られる。Ⅵ類に分類した。24は全体に灰白色の釉を施し，見込み内に段を有する口禿げの小皿である。22・23は，口縁部を外反させ，端部を丸くしたⅢ類に属するものであろう。26～39は碗・皿の高台部分で，27～30については17・18・25などのⅤ類の高台に相当し，細く高い直立した高台をもち，内面に櫛で花文を描いている。26・31・32は玉縁碗Ⅳ－1類の高台，35～38は22・23の高台部と見られ特に38については見込み部分の釉をカキ取っており，皿Ⅲ類の高台であろう。

青白磁（図25，40～44）

青白磁は9点出土している。40は魚と花文を型押しした皿で，全体に灰緑色の釉がかかっている。41・42は合子の蓋で，41は型押しで内は露胎，42は側面に連子を持つ。43は小壺で蓋が付くものである。口縁部は口禿げとなっており，体部下位から高台にかけては露胎。内部見込みはすべて施釉されている。体部には細い蓮弁状の模様がある。45は碗，あるいは杯と思われ，内部に魚文の型押しがなされている。

青磁（図25・26，45～68）

・青磁は，総数358片出土している。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5b・c類が大半を占め，杯・同安窯系青磁碗が数点出土している。45は，碗のⅠ－2類に属するもので，高台径が小さく蓮弁を細く削り出している。釉は全体にかけられるが，畳付け部分は露胎で，赤色を呈す。46・47・53は碗Ⅰ－5b類，51はⅠ－5aに属するものである鎬のないものである。他のものについては，高台部がないため細かな分類はできないがⅠ－5b・c類の鎬蓮弁碗である。釉の色調，蓮弁の大きさ，貫入の有無などにそれぞれに特徴をもつ。56はⅠ－2類の片彫りの蓮華文をもつもので，本遺跡では数が少ない。55・57～60は見込み内にスタンプによる花文様を有するⅠ－5c類。61は淡い青白色の釉を，高台内と畳付

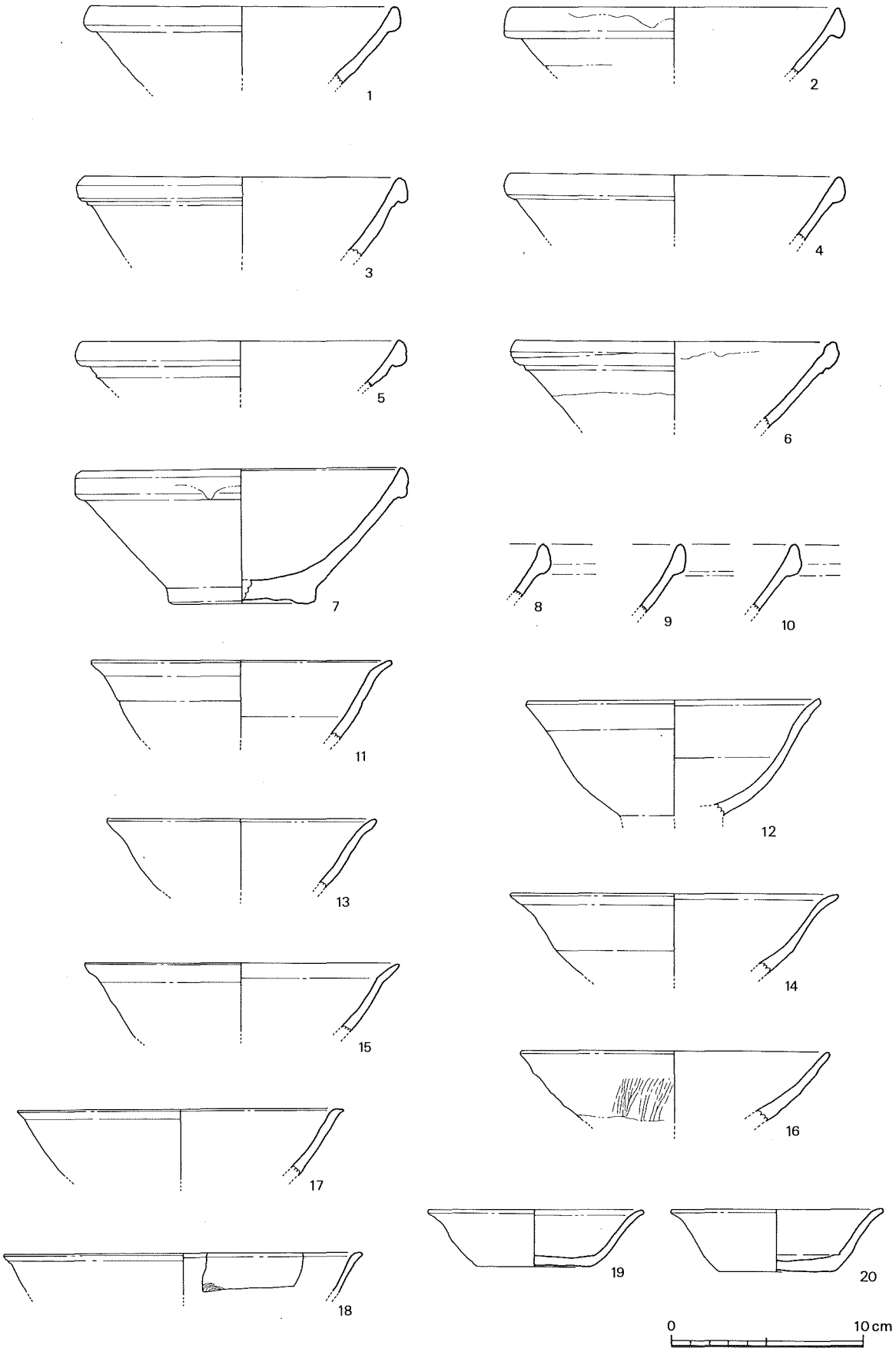


図23　白　磁　碗

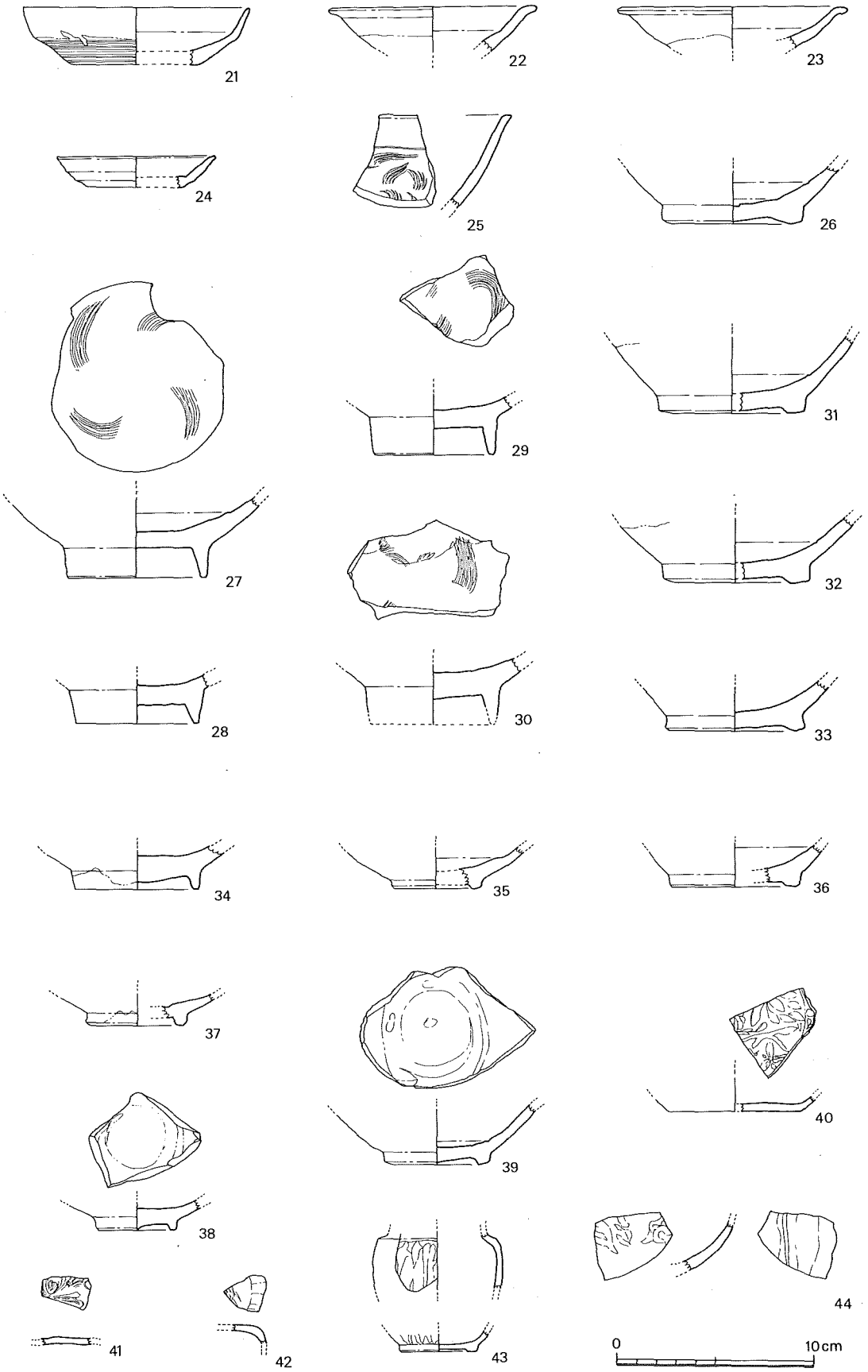

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
10cm

図24　白磁，青白磁

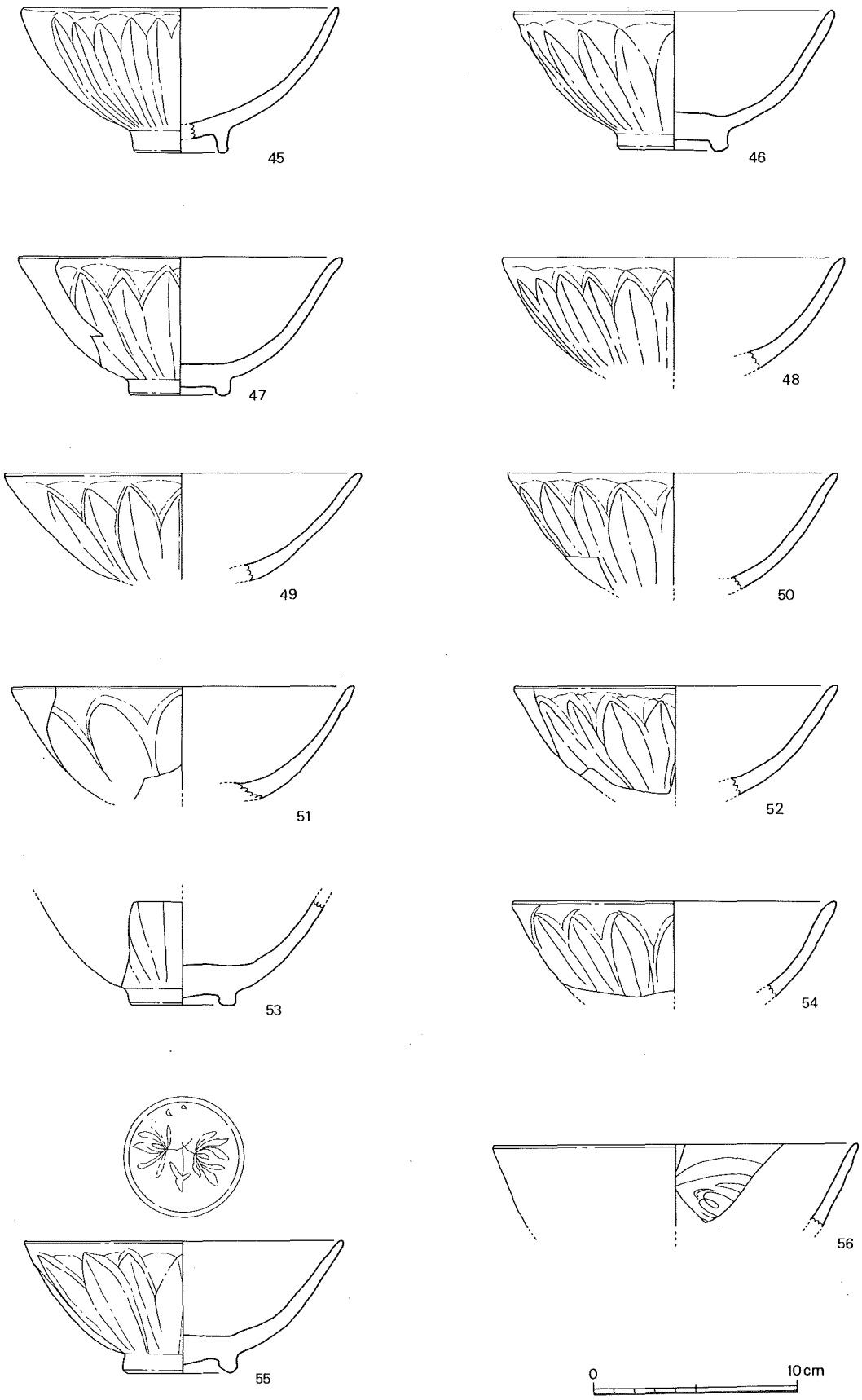


図25　青　磁　碗

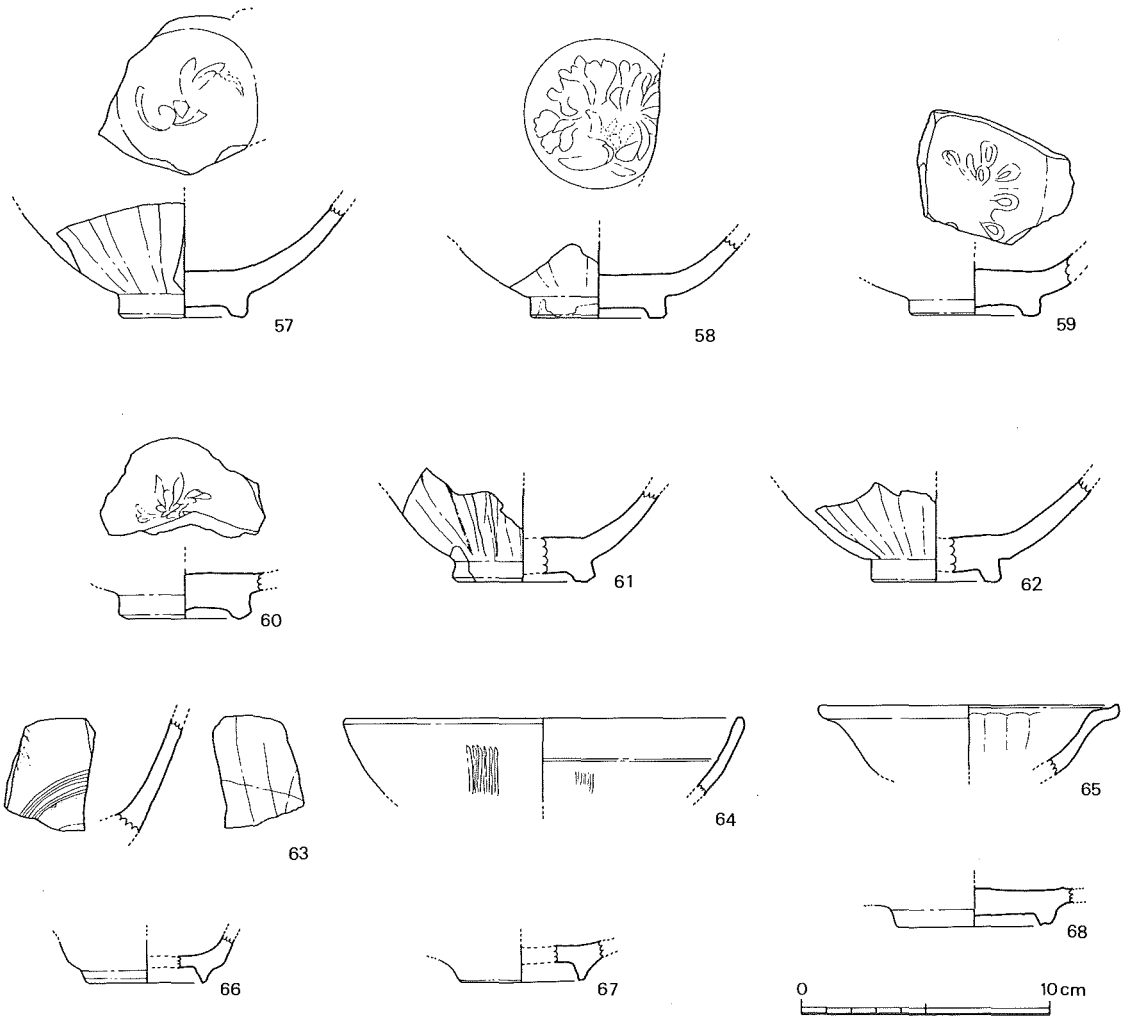


図26　青　磁　碗・皿

を残して全体に施釉する。体部に片彫りの線が1条見られる。青白磁とした45に釉調がよく似ている。

63・64は同安窯系青磁で，63が櫛条のもので内面に花文を描くⅢ類，64は細かい櫛目を有するⅠ類のものである。65～67は龍泉窯系青磁の杯で，65は体部内面に蓮弁を削り出したⅢ－3 b類である。68は青磁の高台で，見込み内底部分の釉を掻き取り，高台は畳付けの部分まで釉がかかるが，高台内側は露胎である。高台は台形状に削られ，畳付けの部分はやや窪んでいる。この手のものは2点出土している。

その他の舶載陶磁器（図27，69～71）

明の染付けが小片をあわせて9片出土している。その他，李朝陶器4片，高麗象眼青磁が1片出土している。象眼青磁については，白磁ⅢⅨ類，龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の出土もあり，14世紀初頭までの時期で押さえられよう。

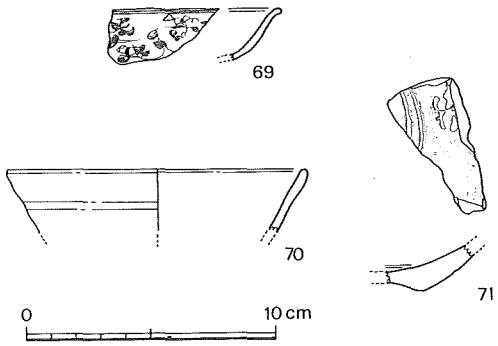


図27　その他の舶載陶磁器

土師質土器（図28，72～83）

土師質土器は，小片も含めて総数136片が出土している。器種として小皿・杯・こね鉢であり，碗と特定できる資料はない。皿はほとんどが糸切り底のもので，器高が低く，体部はやや外側に開く。底の厚さと体部の厚さがほぼ同じものが多いが，79については薄い器壁と灰白色を呈するなど，他と違った様相を示す。外来のものと考えられる。80～82については杯としたが，81については碗の可能性もある。これらの土師皿については，12世紀中頃以降のものとして捉えられよう。83は，土師質のこね鉢で，口縁部が緩い玉縁状を呈する。東播系のこね鉢を意識したものあろう。

瓦質土器（図28，86～90）

瓦質土器は41片出土し，こね鉢10片，すり鉢３片，瓦器碗20片，不明８片の内訳である。86は口縁部をややふくらんだ方形に整形し，口縁直下の見込み部に浅い凹線が走る。内面は横位のハケを密に施し，３条の擂目をもつ。87は内面暗灰色を呈し，斜めに密なハケ目を施す。88は片口で，口縁は方形を呈し，灰白色のものである。89は，内外面ともに暗黒色を呈し，口縁を玉縁状に仕上げ，内外面に密なハケ目を施している。胎土は灰白色を呈する。瓦器碗は図示していないが，小片が20片出土している。

国産陶器（図28，84・85，91～93）

国産陶器としては，東播系14片，須恵質格子叩き甕（樺万丈窯？）８点，須恵質26片がある。84，85は東播系のこね鉢である・84は片口になるもので，口縁部は黒色を呈する。85は淡灰色を呈し，口縁部はやや内側につまみ出されており，13世紀前葉～中葉に位置づけられる。91は須恵質の格子目叩きの甕で，亀山系または，荒尾市の樺万丈窯の可能性も考えねばならない。92・93は，灰白色の焼成良好な甕で，口縁部に丸い溝をもつのが特徴である。

輸入陶器（図28，94～96）

輸入陶器は38片出土している。94は表面灰黒色を呈し，頚部で段を有しほぼ直線状に立ち上がる壺と思われる。内側は，空気が胎土中に入り込んで膨張しており焼成不良である。95は口縁部を内側に突出させ，丸くおさめた鉢である。胎土は赤みがかった灰色を呈し，表面の口縁部直下から黄褐色の自然釉がかかる。96は内外面黒褐色を呈し，上げ底である。底部は体部に比べ薄く作り出している。胎土は灰白色で，白色粒を含む。

滑石製品（図29・30，97～118）

滑石製品は124片出土している。91～110は石鍋片で，鍔のないものから，鍔が方形の耳をもつもの断面台形を呈する鍔のものなど多様である。木戸（1993）編年によるⅠ類として，97があげられる。口縁部に最大厚があり，体部が内彎するものである。県下では，東彼杵町の白井川遺跡で出土しているが，他の地域においても資料数は限られている。10ｃ末の年代が与えられている。98・99はⅡ類に属するもので，方形の耳が縦につき，体部が内彎する。11ｃ代の年代が与えられている。100・102はⅢ－ｂ類で，やや小振りのものである。全体的に丁寧な作りで，鑿痕も残らない程に研磨している。101は，鍔が100・102に比べ，やや下に付くもので，作りも小さい。鍔の上部の削りと，鍔の下部の削り

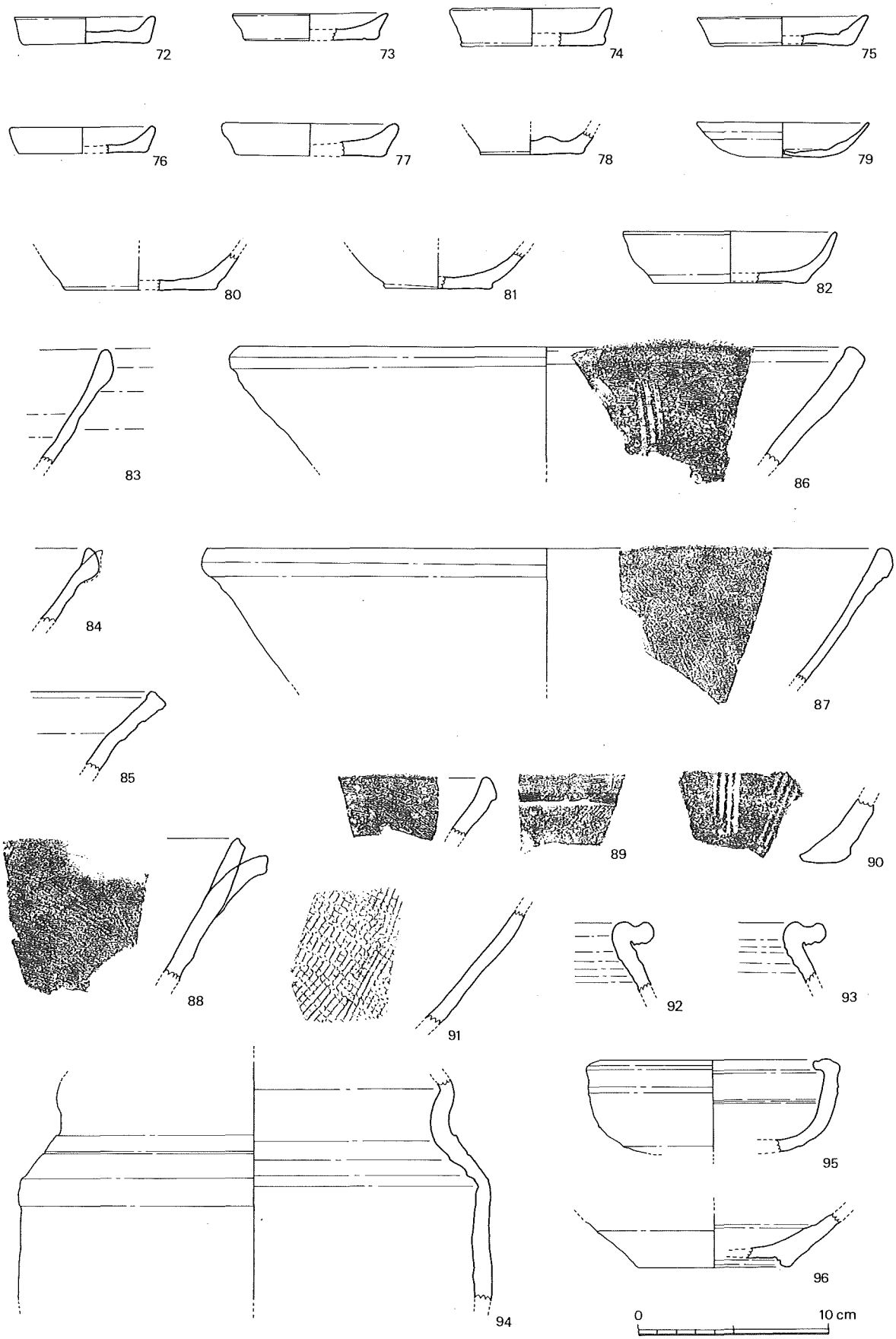

72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
86
84
87
85
89
90
88
91
92
93
94
95
96
0
10 cm

図28　国産・輸入陶磁器

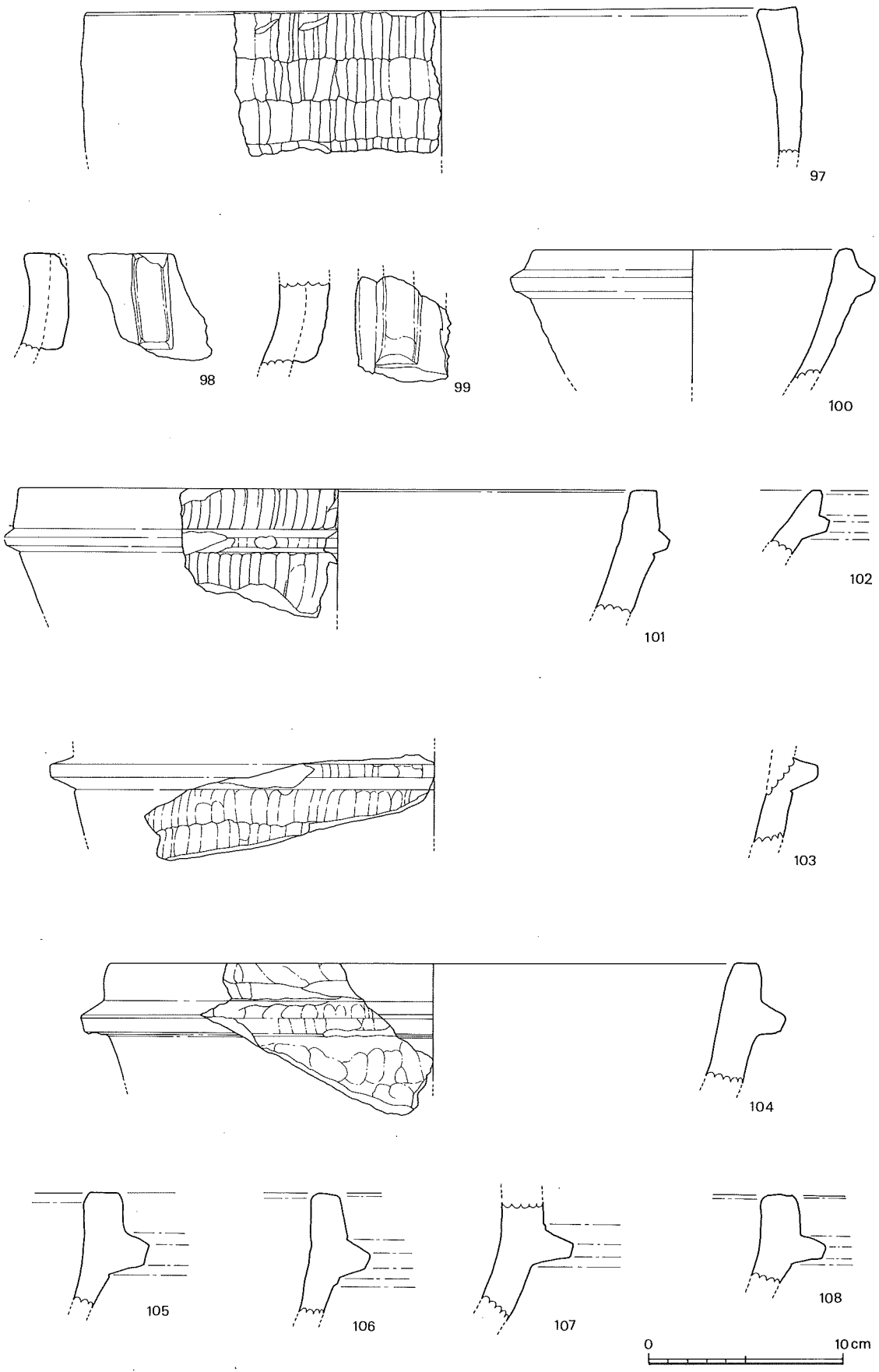


図29 滑 石 製 品

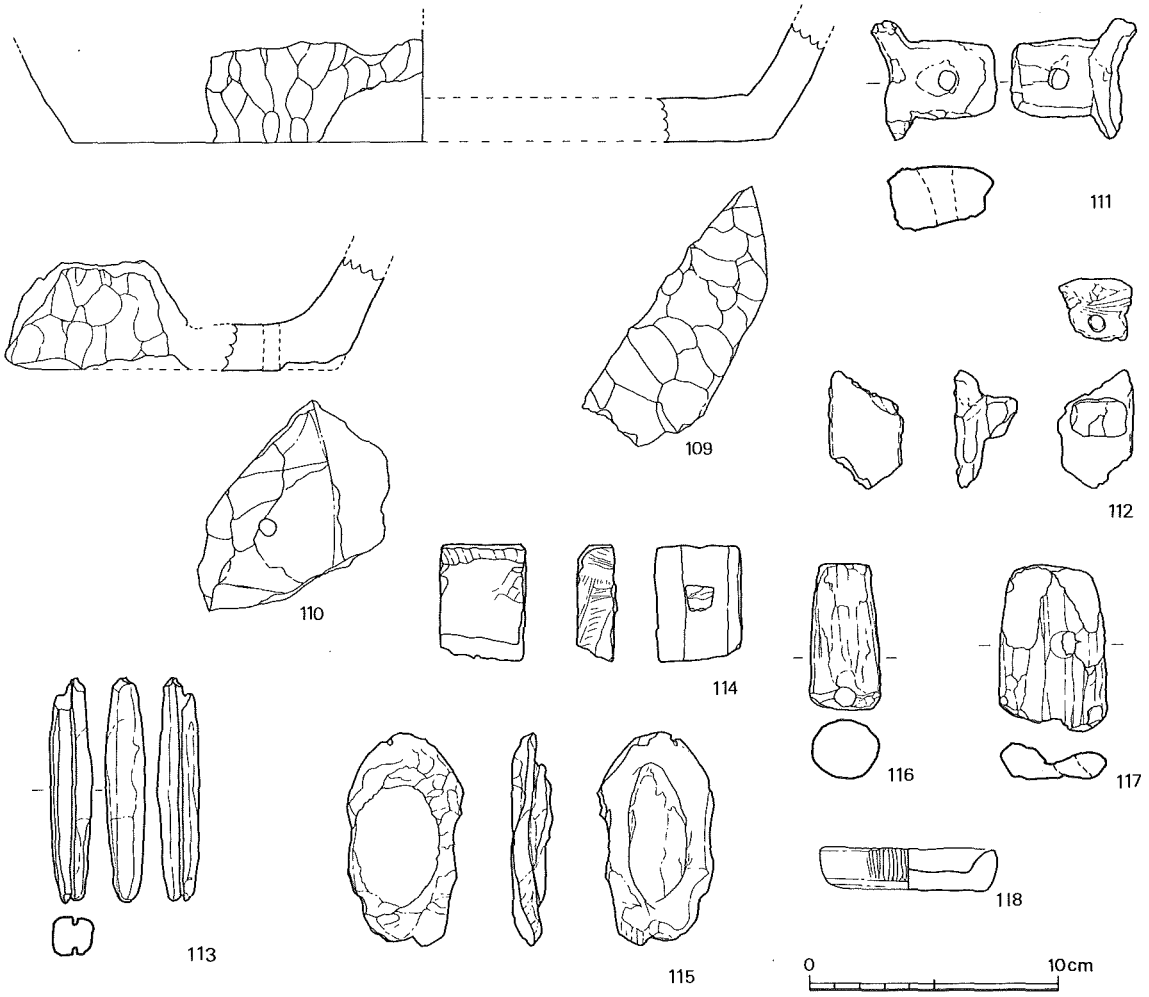


図30　滑　石　製　品

では，鑿の方向が相違する。Ⅲ－ａ－２類に属する。他のものについても，Ⅲ－ａ・ｂ類までの資料であり，全体的に14世紀内に納まる。このことは，陶磁器類の編年と合致するもので，本遺跡が11世紀～14世紀を主体とすることが，石鍋の編年の上からも検証することができた。

109・110は，石鍋の底部片で，109はやや青みがかった滑石を使用し，外面の体部・底部に鑿痕を残すが，内面は丁寧な仕上げを行っている。110は外面全体に煤が付着し，底部に穴を穿って棒状の鉄片を挿入したものである。111以降は石鍋以外の滑石製品を掲載した。111は，鍋状のものに把手を付けたもので，把手には穴を穿っている。穴は，自在鍵状に吊るして使用したかのように内側に擦れている。鍋とすると口径も小さく，小形のものと考えられ，器壁も１cmに満たないものである。吊すということを考慮したならば，滑石の軟質性から考えても大きな把手と，小さな本体でなければならず，この製品はこのことを充たしているように思える。112・115は，バレン状の石製品である。通常，この製品は，石鍋を転用したものが多く，鍔の部分を方形状に作り出し，穴を穿つのが特徴である。松浦市の楼楷田遺跡では，穴の部分に棒状の鉄片が残存した例がある。またこの遺物については，石鍋などの製品が出土する遺跡では，必ず出土していることから，当時の生活のなかでは必需品であっ

たことがわかる。113は錘で，縦方向に一条の溝が一周回っており，丁寧な作りである。114は方形に作り出しているが，用途等は不明である。116・117ついても用途等は不明である。116は円筒状に作り出し，上部と下部を平坦にしている。下部に斜めに穴の痕が残る。117は石鍋を転用したもので，鍔とその直下の体部を使用し，鍔直下を削り出してV字状に作り出している。穴は再加工した時のものか，それ以前のものかについては，判断がつかない。118は小皿状に加工したものである。

以上，中世の陶磁器，及び滑石製品について説明を加えていった。これらの遺物から，本遺跡の陶磁器資料から，おおむね次のⅢ期に分類できる。

Ⅰ期（12世紀前半）	白磁碗Ⅳ・Ⅴ類，石鍋Ⅰ・Ⅱ類を中心とする一群。（瓦器碗が数点出土）
Ⅱ期（12世紀中葉～後半）	龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５ａ・ｂ類を中心とする一群。石鍋Ⅲ－ａ，（他に同安窯系青磁数点）
Ⅲ期（13世紀初頭～14世紀代）	白磁碗・ⅢⅨ類，龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５ａ・ｂ類を中心とする一群。石鍋Ⅲ－ｂ東播系こね鉢

この外，15世紀代の資料も出土しているが，それぞれ数点の出土でしかなく，Ⅰ期～Ⅲ期（12世紀～14世紀）の時期が今回の調査区の主体となる。

図　は，出土土器・陶磁器の組成をグラフ化したものである。それぞれの点数は，小片をも入れた総数であり，資料的にやや偏りもあることは考えられるが，輸入陶磁器が全体の約７割に及ぶことが理解できる。グラフ化はしていないが，破片の中で類別可能なものを点数で細分すると，白磁の場合Ⅰ期に属する碗Ⅳ類が49点，Ⅴ類が35点で圧倒的に多く，Ⅲ期に属するⅨ類の口禿げの碗・皿が46点で，青磁ではⅡ～Ⅲ期に属する碗Ⅰ－５ａ・ｂ類が90％以上を占める。同安窯系の青磁が少ないことも特徴といえよう。

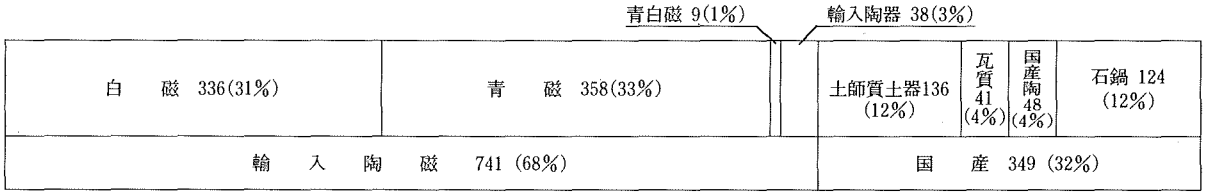


表５　伊木力遺跡Ｂ地点出土の土器・陶磁器の組成

参考文献

1．長崎県文化財調査報告書　第84集『今福遺跡Ⅲ』 1986
2．太宰府市教育委員会　太宰府市の文化財第７集 『太宰府条坊跡Ⅱ』 1983
3．長崎県文化財調査報告書　第99集 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』Ⅷ　1991
4．日本中世土器研究会編 『中近世土器の基礎研究Ⅸ』 木戸雅寿　― 石鍋の生産と流通について ―　p127～pp143　1993
5．森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 『大宰府陶磁器研究』 1995
6．太宰府市史編集委員会 『太宰府市史』考古資料編　山本信夫　第十章　第二節　― 大宰府と貿易陶磁 ―　p670～pp685　1992
7．東彼杵町文化財調査報告書　第２集 『岡遺跡』1988
8．長崎県教育委員会　松浦市教育委員会編　長崎県文化財調査報告書第76集 『楼楷田遺跡』 1985

V まとめ

弥生土器・土師器

弥生土器・古式土師器は，少量の弥生中期後葉と古墳時代初頭の土器を含む他は，ほとんどが弥生後期後葉から終末期に位置づけられるものであった。器種・器形上では島原半島の該期の資料と共通する部分が多く，大村湾の南沿岸部に位置する伊木力遺跡が，土器の上では島原半島を含む有明海沿岸の文化圏に含まれていたことがうかがえる。

時期は少量の布留式古段階の土器を下限の指標とでき，この時期で居住域としてはいったん廃絶されるようである。この時期の外来系土器と在地系土器との共伴関係と編年的位置づけは今回の資料では明らかにし得ないが，今後の課題としておきたい。

そのほかの土器の全体的な特徴としては，摩耗が著しいこともあるが，概して粗製で，焼成もあまり堅緻でなく，胎土は石英と長石を主体とする砂粒を多く含むことがあげられる。角閃石を含むものは少量見られ，金雲母を含むものは更に少なく，搬入品と思われる土器に含まれる傾向があった。

また土器の集計を試みたが，全体的に器種構成では台付甕が主体を占め，ついで壺，高坏と続いて多い。透かし窓付き器台は細片でも器種を識別し得るため，他の器種よりやや多めに数えられているかも知れないが，器種構成の中で一定の部分を占めると言えよう。この器種には精製品と比較的粗製の大型品とがあり，用途に違いがあるのかも知れない。また壺としたものの中でも大型品は壺棺の可能性があり，注意する必要があろう。そのほかに土製品としては手づくね土器や土錘が出土した。

石　　器

土器の項で述べているように，本遺跡から出土した土器群は，中世の輸入陶磁器類と微量の縄文晩期と思われる例を除いては，弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけられる資料が圧倒的多数を占めている。土層自体は攪乱された二次堆積の様相を呈しており，陶磁器類と弥生土器，土師器，石器群の三者は，基本的に第3層および第4層を主要な包含層としている。このように攪乱された状況で出土しているため，石器の時期を特定することは困難である。明らかに旧石器時代の所産と判断できる二例のナイフ形石器を除く，剥片石器群の技術的特徴や一定量の扁平打製石斧を器種組成の構成員として有する点など，極めて縄文時代的色彩の強い石器群であるといえるし，少量とはいえ縄文土器が出土していることを考えれば，縄文時代後期～晩期の所産として理解することも可能ではある。

一般に弥生時代後期は，鉄器の生産性向上に伴って急速に石器が衰退していく段階と理解されており，北九州地方では中期後半になると掻器・削器・石匙などの剥片石器類は消滅するようである。この傾向は大勢としては本県でも認められるが，例えば森山町西ノ角遺跡では弥生中期終末～後期を主体としながらも黒曜石製の剥片石器群が出土している。こうした類例を傍証として本石器群の帰属時期を考えた場合，層位的に不確実な面があり，また縄文時代に帰属する例が混在している可能性は否定できないにせよ，伴出土器との量的な対応関係から見る限り，大半は弥生時代後期～古墳時代初頭

に位置づけるのが妥当であろうと思われる。

石庖丁形石器は，参考資料として図示した二本木遺跡例が弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡から打製石斧を共伴して出土しており，時期的にも本遺跡例と矛盾しないことから該期の所産であることはほぼ確実と思われる。用途について二本木遺跡の報告者は「有孔の磨製石庖丁に替わる穂摘み具と考える。鉄器では小型の手鎌が数点出土しているが，石庖丁形石器はこれを補充するものであろう」としている。本遺跡では磨製石庖丁・鉄鎌ともに出土しておらず，大陸系の磨製石器や鉄製品自体が希少であることから，収穫用石器としては石庖丁形石器が主体であった可能性が強く，それは生産活動における農耕の比重が比較的小さかったことを示唆しているのかもしれない。小型石錘の存在は，大村湾を舞台とした漁労活動が行われていた可能性を示しているし，黒曜石やサヌカイト質安山岩を用材とした多量の剝片石器群は，縄文時代のそれと本質的に同質であるが，弥生時代後期に至ってもなお利用されていることは，注目すべき事象である。鉄器普及の後進性に起因することであろうが，北部九州のような先進地域とは対照的な様相を呈するだけに，今後，弥生時代後期の地域性や多様性を検証する上で重要な意味を持つ資料といえよう。

鉄　製　品

２点のみの出土であり，しかも細片であるが，弥生時代から古墳時代初頭に属するものかと思われる。漁労具および鉄鏃と推定したが，当時この地域でもある程度鉄器が普及していたことを示す資料である。

出土陶磁器と伊木力氏

遺跡出土の磁器のなかで，主体となるものは白磁碗Ⅳ・Ⅴ類，龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５ａ・ｂ類，ⅢⅨ類であり，12世紀～14世紀が主体となることはすでに述べた。この時期以降の遺物については明の染付けがごく少量出土しているのみであり，15世紀以降の遺物については極端に少なくなっている。これらの遺物については，歴史的環境の項でも記載したように，当地の豪族伊木力氏との関連が非常に強いものと考えられる。伊木力氏については，『正慶乱離志裏文書』・『深堀文書』・『福田家文書』等に名前を連ねており，一族の藤原氏とともに伊木力の地を領有していたことが知られる。この三つの文献は共に14世紀代のものであり，出土遺物の後半の時期と照合する。12～13世紀についても文献上の記録はないが，伊木力氏との関連が非常に強いものと考えて差し支えないであろう。15～16世紀には，伊木力氏について文献上の記録はなくなり，伊木力の地名そのものも文献には登場しなくなることが『多良見町誌』にも書かれているが，このことについても今回の遺物の時期と符合するものであり，15～16世紀の伊木力については，遺物の面からも文献の面からも不明の点が多いと言える。

このように伊木力氏の出現については，遺物からほぼ12世紀に求められることが考えられ，14世紀には文献等からも裏付けが可能である。15世紀以降の伊木力氏については，他の小豪族が何らかの形で文献上に登場するにも関わらず，伊木力氏については不明であることから次のことが考えられよう。

中世の中小豪族が文献上によく登場するのは，南北朝の争乱の時期の14世紀のころと，戦国時代の16世紀後半であり，伊木力氏が文献上に登場するのは，先の南北朝の争乱の時の，南方一揆のときのことである。これ以後文献上から姿を表さなくなることから，この時期に大きな勢力に吸収された可能性が大きいと思われる。変わって戦国時代には，多良見町内に喜々津城と言われる城があったことがルイスフロイスの書簡にでており，元は西郷氏の城であったことが知られている。15世紀から16世紀にかけてこの地域は，大村氏と西郷氏が勢力争いを展開した地域であり，周辺の中小豪族は，その家臣団に編成されるか，滅ぼされるという憂き目にあっている。しかし，大村氏・西郷氏の家臣としての伊木力氏の名は残っておらず，滅ぼされたという記録もない。ただ，大村純忠のころに，伊木力の地が大村領であったことは文献から確認でき，1612年の検知の際に，もとは大村氏の一門庶子が領有していたことが知られている。ただし，江戸期における伊木力は大村藩と諫早藩の飛び地とに二分されており，これも元は大村氏と西郷氏の領地を表しているとも考えられる。伊木力の地は，長崎往還の際の寄港地として重要な位置にあり，古くから要衝の地であったため，領地争いの対象となり，その結果在地の豪族であった伊木力氏が，滅んでしまったことも考えられよう。

今回調査区の遺物は，12世紀から14世紀が主体であることは，何回か記載した。文献上に記載されていない歴史が，この伊木力の地に存在することは事実であろうし，調査区そのものも限定された中での調査であるため，中世の生活の場が移動したことも考えなければならない。また，遺跡の背景に位置する中通（舟津）城と伊木力氏との関連を考えた場合，この城の築城は南北朝の頃と推定でき，その後の利用等については，この城の綿密な調査が必要となろう。

参考文献

1　角川書店 『角川日本地名大辞典』 42　長崎県　1977

2　多良見町教育委員会 『多良見町郷土誌』 1995

3　長崎県 『長崎県史』 古代・中世編

4　関　俊彦　1979 「弥生式石器の編年」 『新版考古学講座』 第4巻　原史文化（上） 弥生文化　雄山閣

5　山口譲治　1988 「石器」 『特集　縄文と弥生を比較する』 季刊考古学 第23号

6　高野晋司　1985 「西ノ角遺跡出土の石器について」 『西ノ角遺跡』 長崎県文化財調査報告書　長崎県教育委員会

7　清水宗昭・坂本嘉弘・讃岐和夫 1980 「第2章 第4節－3 遺物についての2・3の問題 (1) 石器」『大野原の遺跡　── 大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書 ── 』 大野町教育委員会

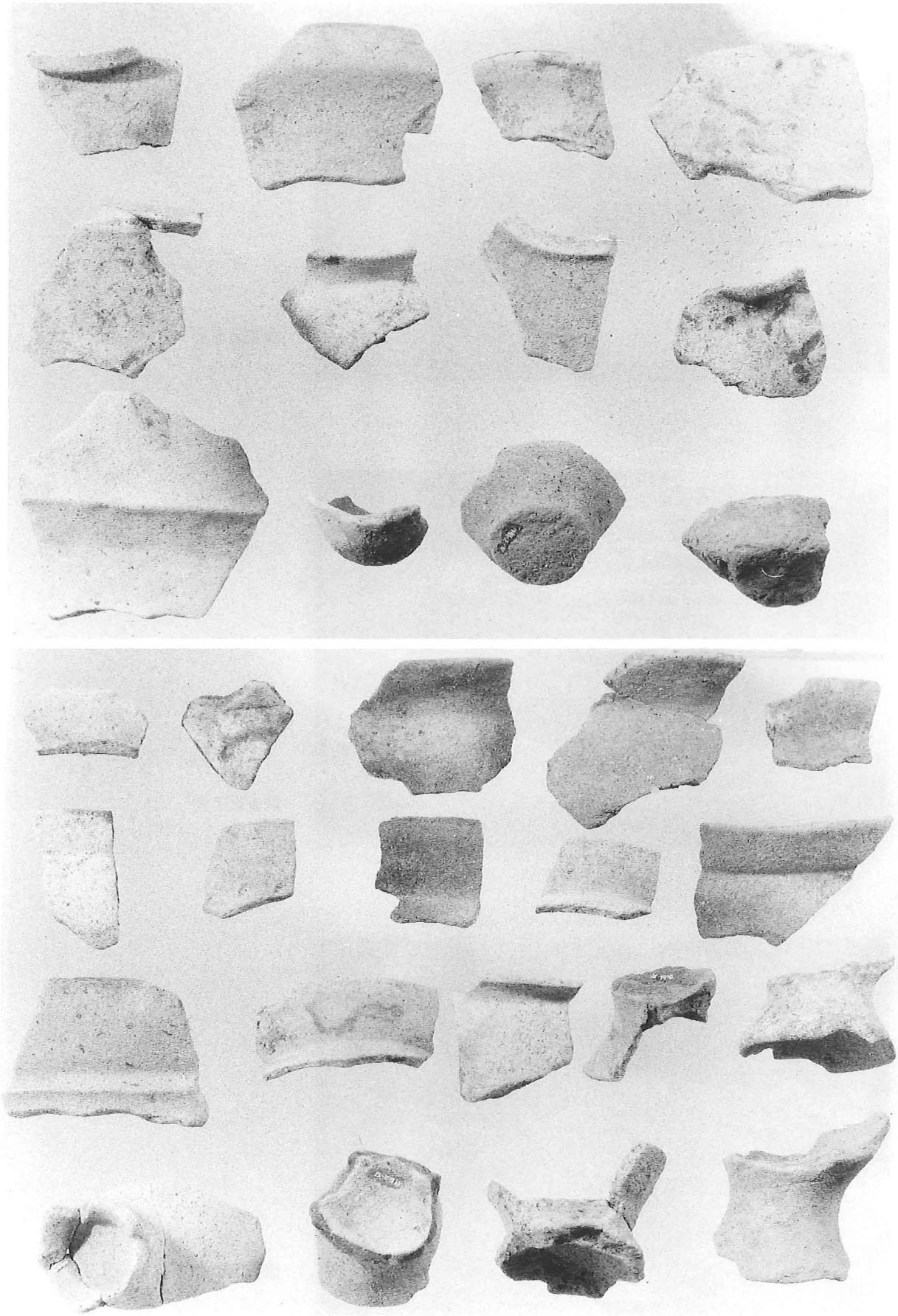
図　　版

調査区遠景

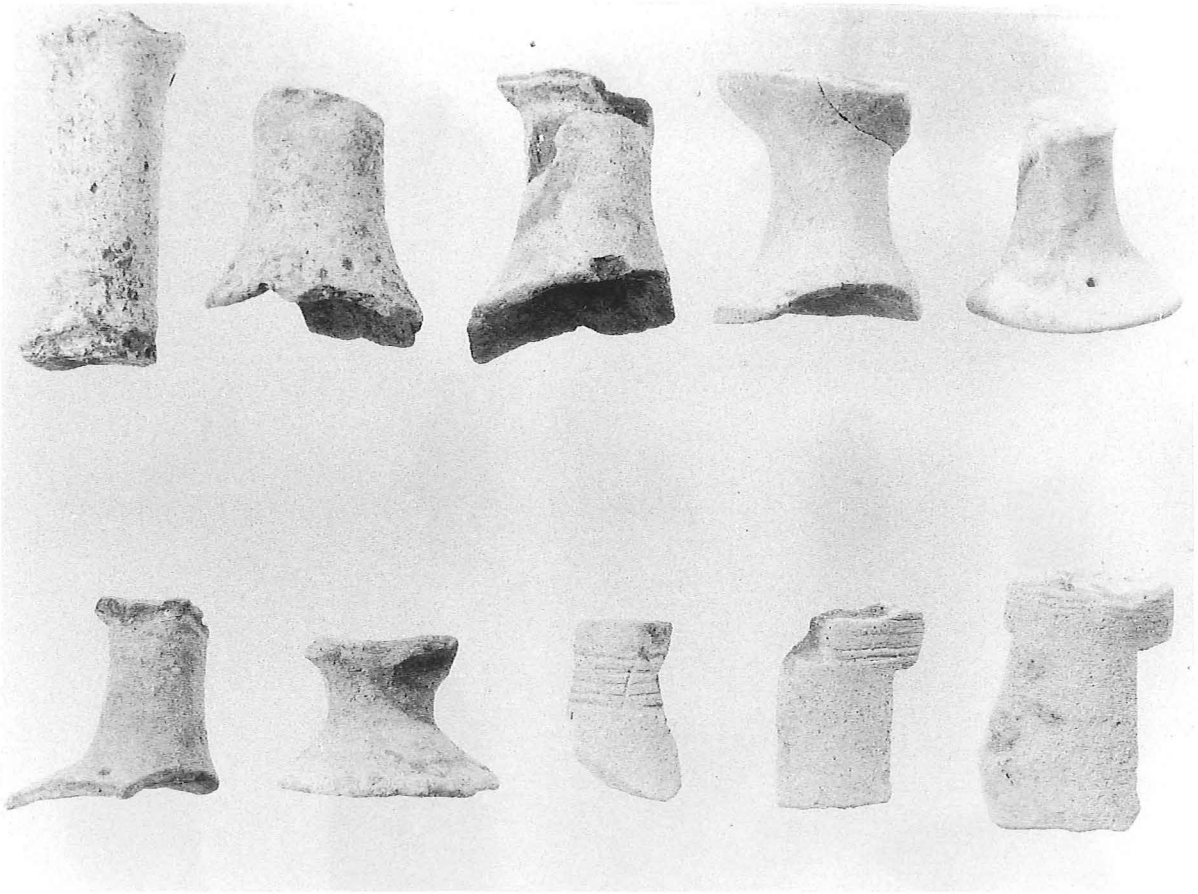
調査区近景

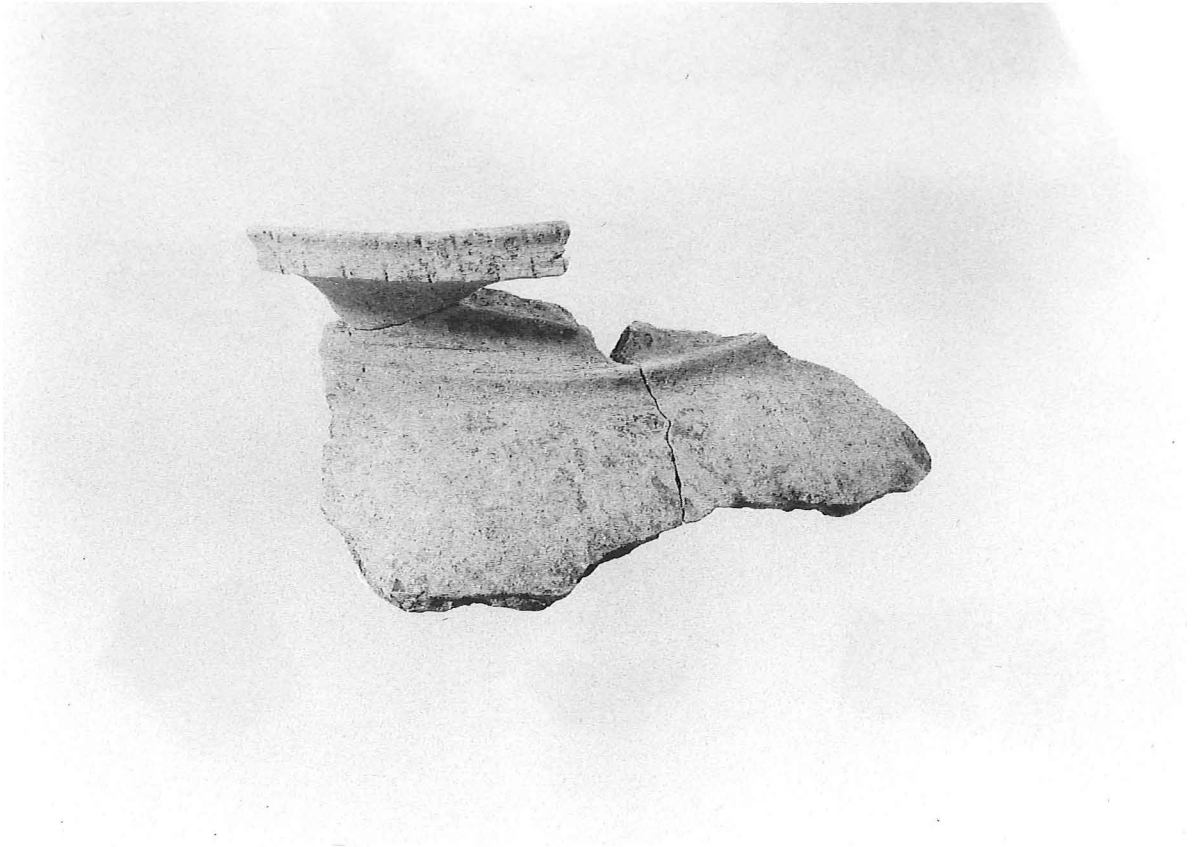
調査区完掘状況

図版１　調査区遠・近景

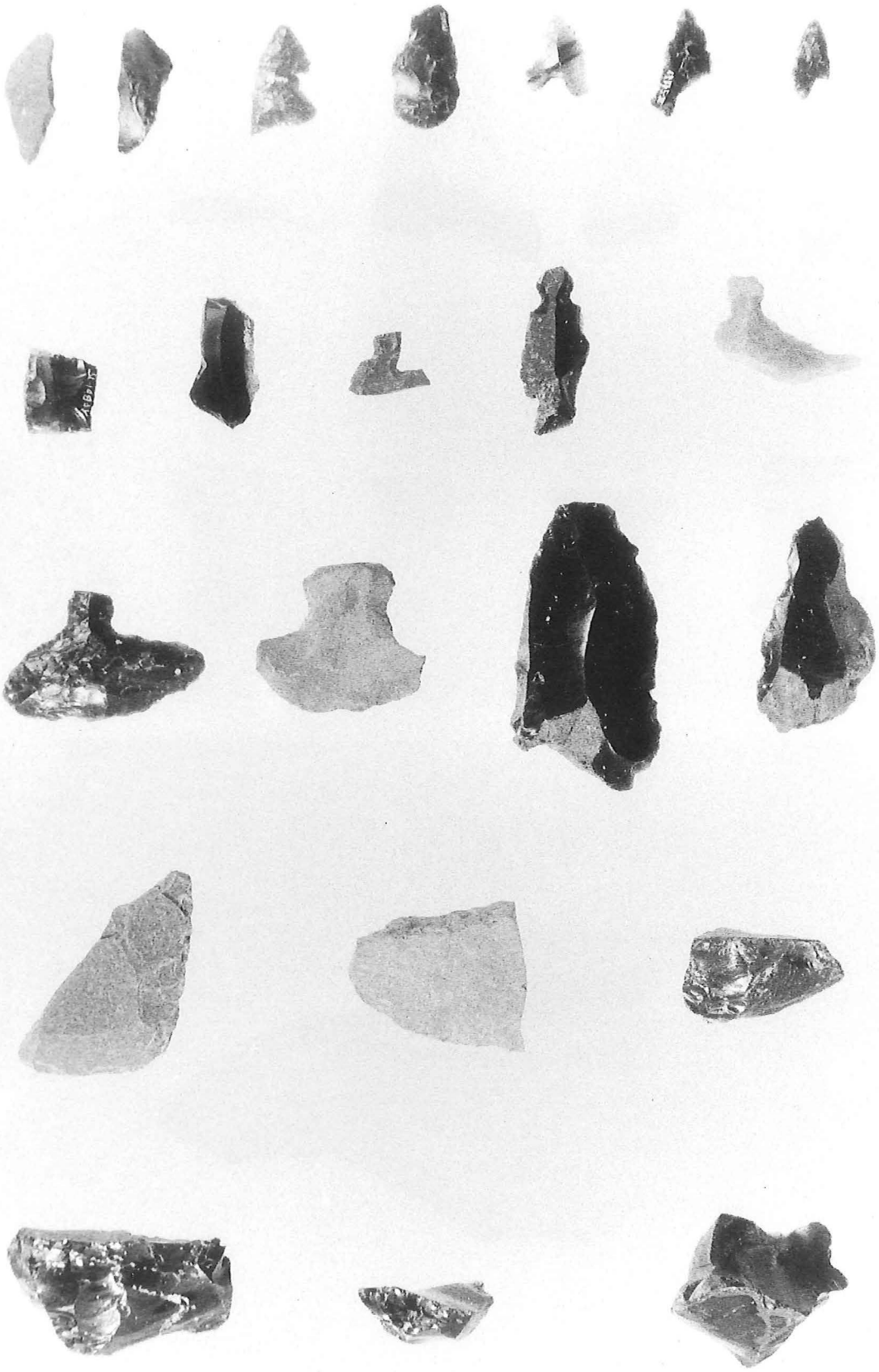


図版 2　弥生土器・古式土師器

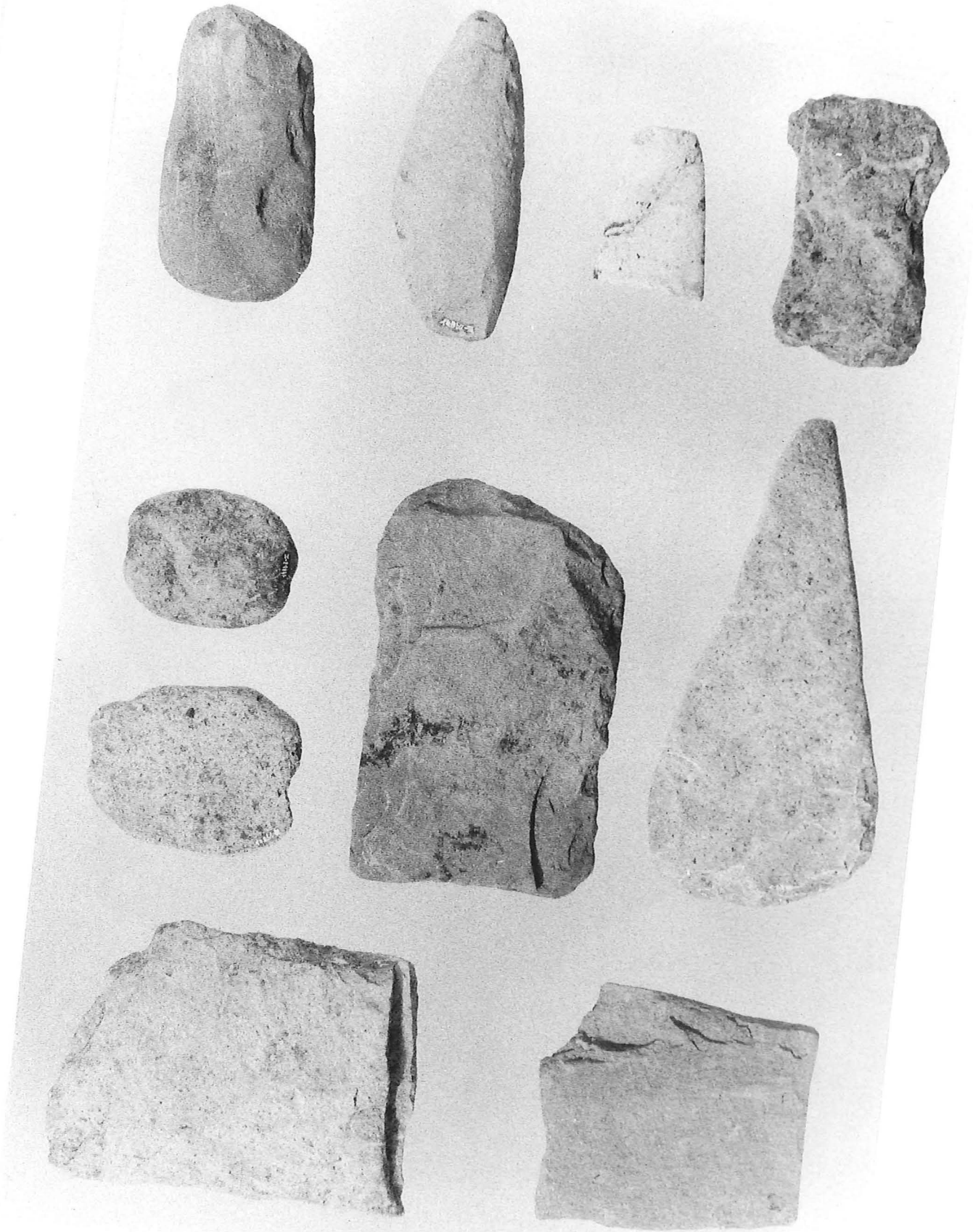




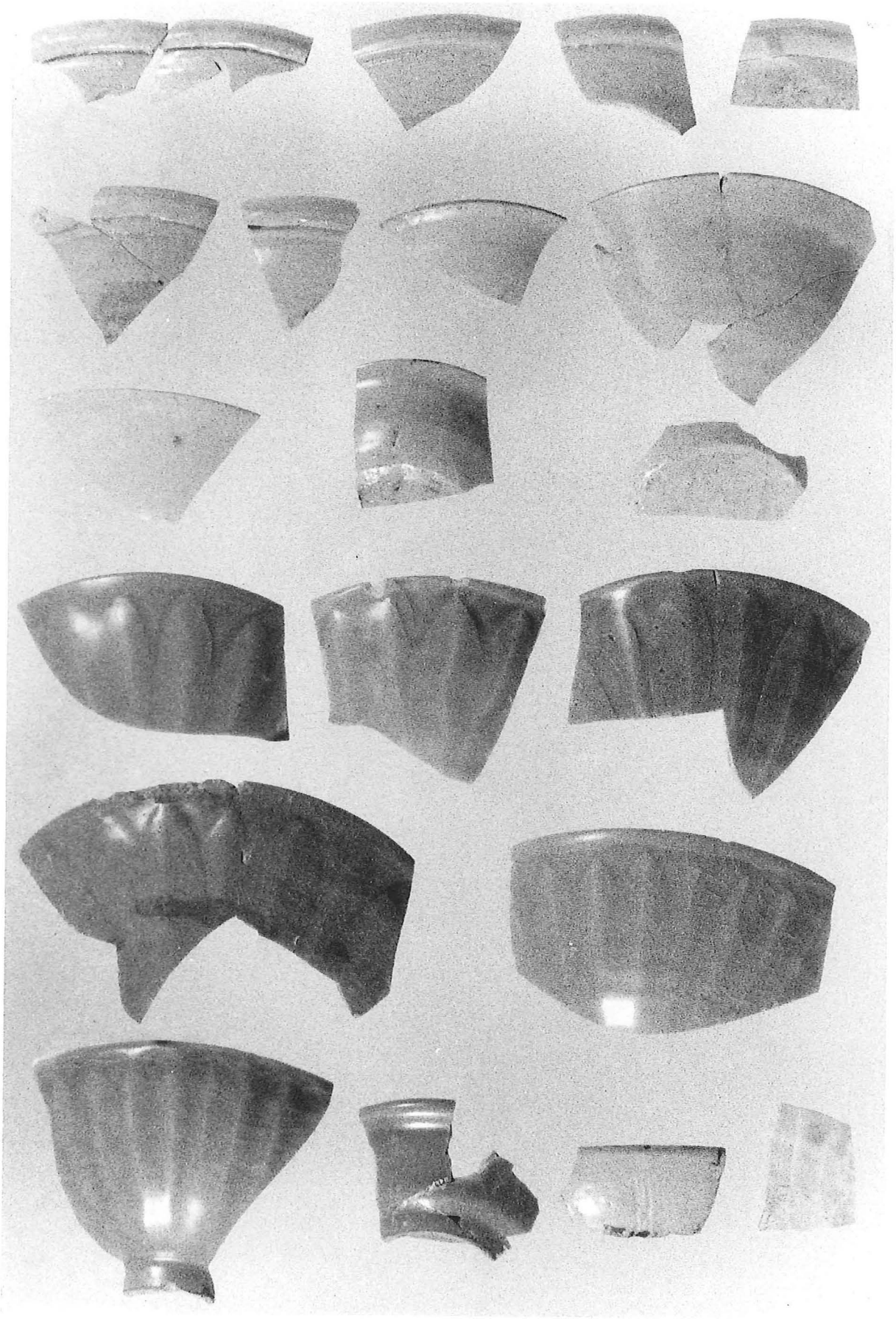
図版3　弥　生　土　器



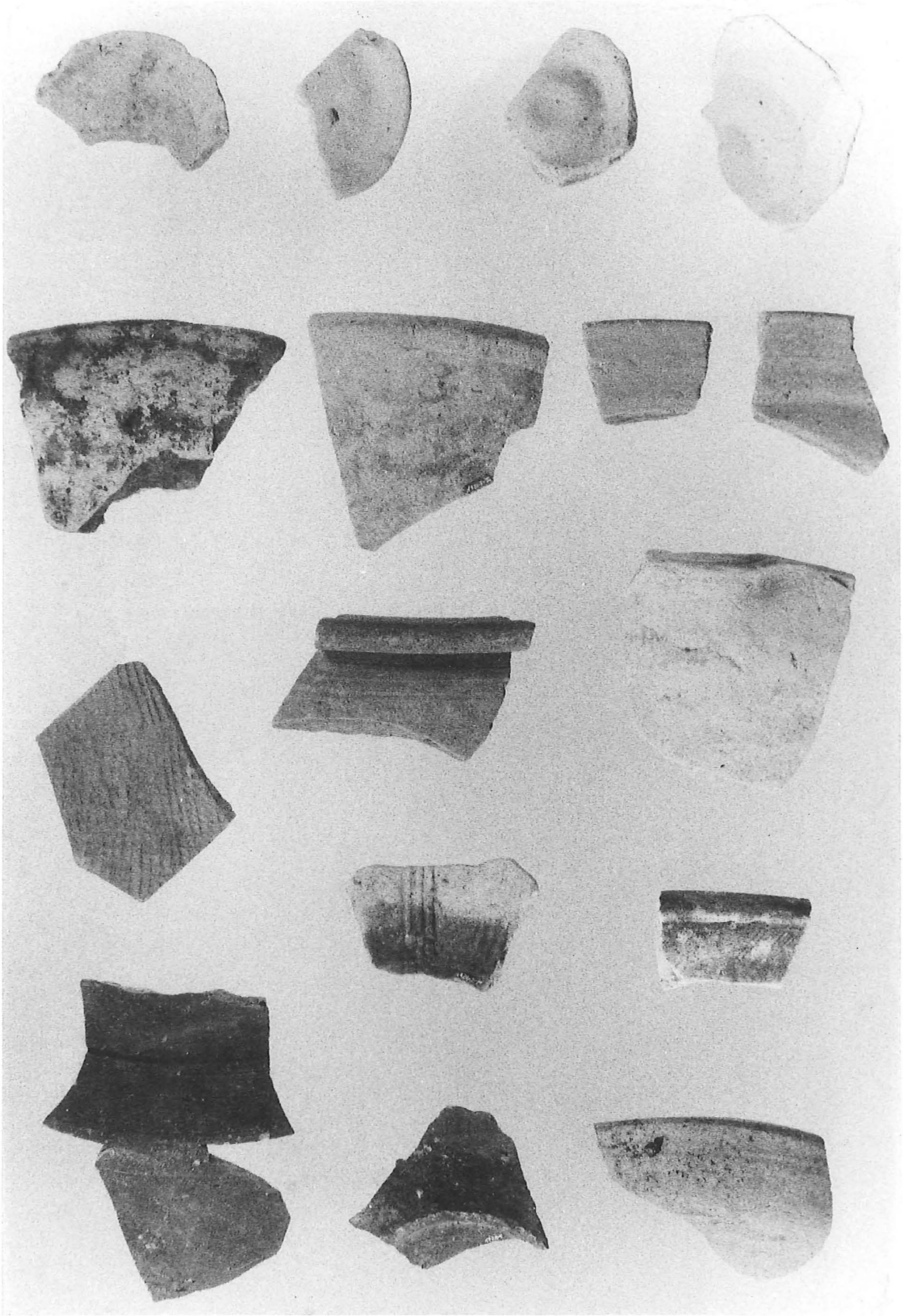
図版4　剝 片 石 器



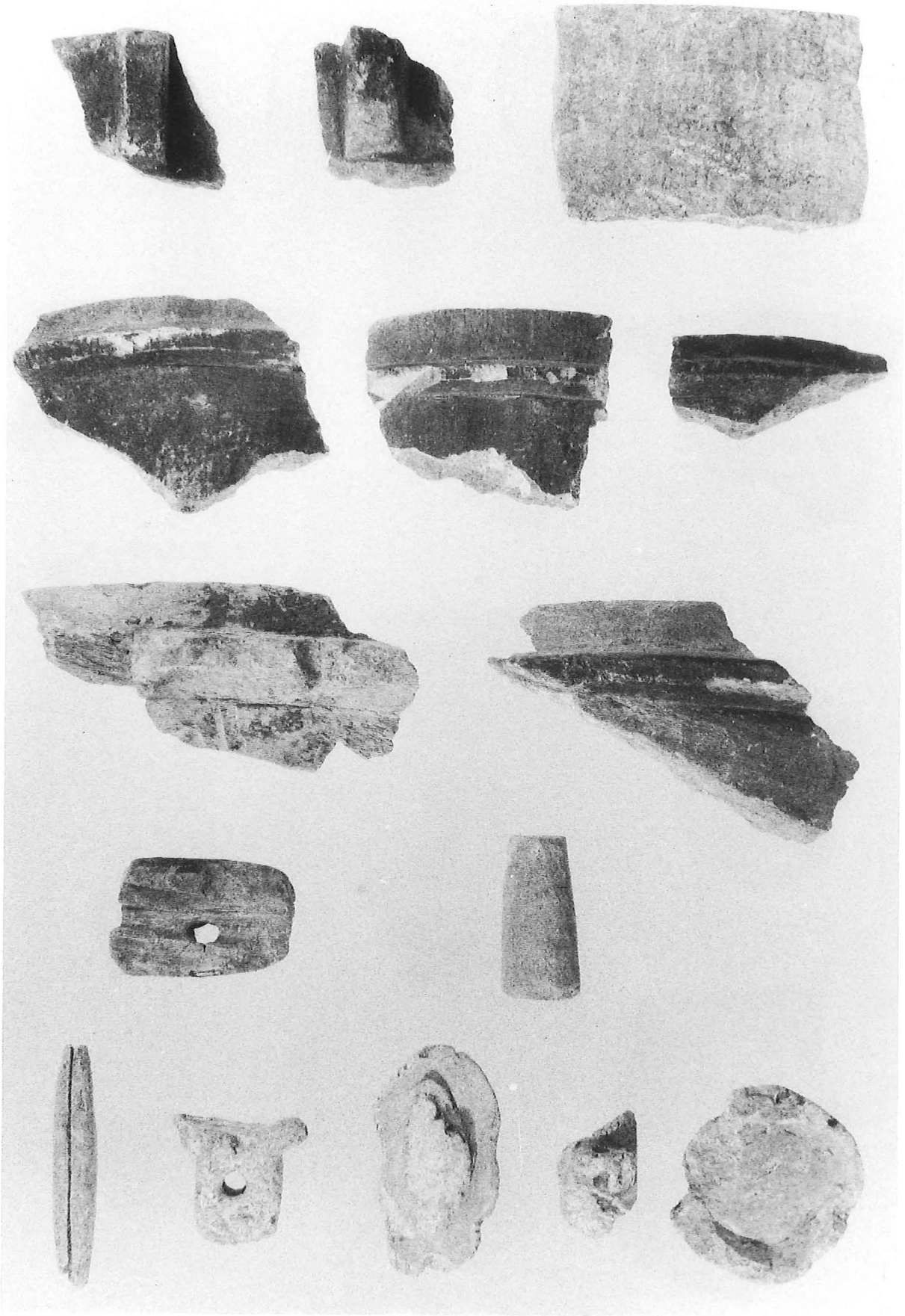
図版5　礫　石　器



図版6　白磁・青磁



図版7　国産・輸入陶器



図版8　滑　石　製　品

長崎県文化財調査報告書　第126集

伊木力遺跡Ⅰ

平成８年３月31日

発　行　　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町２－１３
印　刷　　㈲三省堂印刷所